Japan Communication Association

日本コミュニケーション学会

第 53 回年次大会

地域と記憶

Regions and Memories

2024 年 6 月 1 日（土）～ 6 月 2 日（日）

June 1-2 2024

東北工業大学八木山キャンパス

[大会参加者へのご案内]

1. 受付は、東北工業大学八木山キャンパス９号館１階にあります。それぞれの発表会場に入る前に、必ず受付にお立ち寄りください。
2. 本年次大会へは Peatix（https://jca2024conference.peatix.com/）より、オンラインでお申込みください。大会参加費は、本学会会員は 4,000 円（学生会員および準会員は 2,000 円）、非会員は 5,000 円です。支払われた参加費の払い戻しはありません。6 月 1 日午前 10 時の大会開始後の申し込み・支払いは、会場受付（現金のみ）にて対応します。年次大会のパネル、研究発表への参加は参加費を支払った方に限定されます。但し、6 月 1 日（土）の基調講演とシンポジウムは一般公開であり、事前参加申し込みをした場合にはどなたでもご参加頂けます。
3. 昼食について：会場校周辺に飲食店が少ない為、弁当を予約いただくか、ご持参ください。弁当予約は 1 日目(6/1)のみです。弁当の予約をご希望の方は、以下のリンクから弁当チケットの購入をお願いいたします。予約の都合上、年次大会参加申し込みよりも期限が早くなっておりますのでご注意ください。期日は５月１５日（水）です。
   https://jca2024conferencepartylunch.peatix.com
4. 領収書の発行：以下のヘルプをご確認いただき、宛名と但し書きの編集をしたうえで、領収データの発行を行うことができます。
   https://help-attendee.peatix.com/ja-JP/support/solutions/articles/44001821741
5. その他注意事項：
   - 大会参加費支払い後の返金・キャンセルはできませんので、ご了承ください。
   - 日本コミュニケーション学会会員・非会員問わず参加することができます。
   - 本大会はスマートフォンやデジタルカメラ等による撮影及び録音は一切禁止いたします。
   - イベントの無断録音、録画、動画サイトなどへの無断転載・共有を行った場合、法的責任に問われる場合があります。
6. 本年次大会は、すべて対面で実施されます。

[発表者の方へ]

1. 機器をお使いになる方は、操作等の確認を予めお願いいたします。プロジェクター、及びスクリーン、HDMIケーブルは発表教室の全てに設置されております。また、操作については午前中の発表の方は、最初のセッションが始まる前、午後の方は昼休みにご確認ください。
2. 研究発表は、質疑応答を含めて30分です。時間厳守でお願いします。
3. やむを得ない事情で発表ができなくなった方は、すみやかに学術局までご連絡ください。なお、当日の緊急連絡は下の囲みの3つのメールアドレスに同時発信でお願いいたします。

[司会の方へ]

1. 発表開始10分前までに会場に入り、発表者と事前の打ち合わせを行ってください。
2. 発表開始と発表終了の時間を厳守してください。発表終了の時刻になったら、次の研究発表に移ってください。
3. 発表が取り消しとなった場合は、次の発表の前倒しをしないで、その時間帯をあけておいてください。事前に研究発表の取り消しを、学術局が把握している場合は、その旨をお伝えします。

事前問合せ先：
大会実行委員長　宮曽根　美香　E-mail: mittie@tohtech.ac.jp
発表・論文について：
学術局　日高　勝之　E-mail: k-hidaka@wa2.so-net.ne.jp
事前問合せ及び当日問合せ先：
事務局　松島　綾　E-mail: aya162@fc.ritsumei.ac.jp

[Information for Participants]

1. Please come to the registration desk upon your arrival, located in the first floor, Building Number 9, Tohoku Institute of Technology, Yagiyama Campus.
2. Please register for the annual convention online, using the Peatix registration page (https://jca2024conference.peatix.com/). The registration fee is 4,000 yen for JCA members (2,000 yen for student members and associate members) and 5,000 yen for non-members. Please register on or before 10 AM Saturday, June 1. Once the annual convention starts, registration and payment are conducted only at the convention registration desk (cash only). All the sessions other than Keynote Address and Symposium are open to those who pay the registration fee. Please note that Keynote Address and Symposium on Saturday, June 1 are open to the public (pre-registration is required).
3.) Lunch: Please make a reservation or bring your own lunch as there are not many restaurants around the venue. A boxed lunch reservations are only for Day 1 (6/1). If you wish to reserve a boxed lunch, please purchase a boxed lunch ticket from the link below. Please note that due to the convenience of reservations, the deadline is earlier than the Annual Meeting registration. The due date is Wednesday, May 15. https://jca2024conferencepartylunch.peatix.com
4.) Receipt issuance: Please check the help information below to edit the address and proviso before issuing the receipt data. https://help-attendee.peatix.com/ja-JP/support/solutions/articles/44001821741
5. Other notes:
   - Please note that no refunds or cancellations are allowed after payment of the conference registration fee.
   - Both members and non-members of the Japan Communication Assciation may participate in the conference.
   - Photography and recording by smartphones and digital cameras are strictly prohibited.
   - Unauthorized recording or videotaping of events, or unauthorized reproduction or sharing on video websites may result in legal liability.
4. The annual convention will be held face to face exclusively.

[To Presenters]

1. All rooms are equipped with projectors, screens and HDMI cable. You are advised to try out the equipment prior to your presentation, either before the first session starts or during lunch time.
2. The length of presentation is 30 minutes including questions and answers. Please adhere strictly to the punctual start and finish times of the presentation.
3. In case of cancellation of the presentation, please notify the Office of Academic Services in advance, or any accidental cancellation should be notified by an e-mail to all three addresses listed below.

[To Session Chairs]

1. Please be at the designated room 10 minutes prior to the start of the session.
2. Strictly adhere to the start and finish times of each presentation.
3. In case of cancellation, do not proceed immediately to the next presentation but leave the time slot intact. You will be notified when any accidental cancellation should happen beforehand.

General Inquiry:
Mika Miyasone (Program Chair) E-mail: mittie@tohtech.ac.jp

Inquiry about presentation/papers before the convention:
Academic Affairs (Conference Planning) Katsuyuki Hidaka
E-mail: k-hidaka@wa2.so-net.ne.jp

Any inquiry during the convention:
Secretary General Aya Matsushima E-mail: aya162@fc.ritsumei.ac.jp

スケジュール

第 1 日　6 月 1 日(土)

	A 会場 (936)	B 会場 (935)	C 会場 (934)
セッション 1 10:00 – 11:30	東北支部企画シンポジウム 地域とウェルビーング 〈宮曽根、金井、二瀬〉 司会：宮曽根	研究発表 1 （ディスコースとコミュニケーション） 〈清宮、張・守﨑、郭〉 司会：高永	談話室
支 部 会・昼 食 11:40 – 12:30	北海道 (936 教室), 東 北 (936 教室), 関 東 (936 教室), 中 部 (935 教室), 関 西 (935 教室), 中国四国 (934 教室), 九 州 (934 教室)		
セッション 2 12:45 – 14:15 (13:45)	関西支部企画パネル （コミュニケーション・ビブリオバトル） 〈守﨑、日高、森口、野島〉 司会：小山	研究発表 2 （コミュニケーション実践） 〈Walgrave & Shibuya、上土井〉 司会：師岡	研究発表 3 （レトリック・公的言論） 〈青沼、田島、東〉 司会：松本
総会・基調講演・シンポジウムは D 会場（937）を使用			
総会 14:30 – 15:15	**総　会** 司会：松島　綾（JCA 事務局長） 挨拶：守﨑　誠一（JCA 会長）		
学術講演 15:30 – 16:30	**基調講演**（一般公開） 基調講演者：赤坂　憲雄		
シンポジウム 16:40 – 17:50	**シンポジウム**（一般公開） シンポジスト：赤坂　憲雄（民俗学者） 河合　優子（立教大学） 藤巻　光浩（フェリス女学院大学） 司会：日高　勝之（立命館大学）		
懇親会 18:15-20:00			

第 2 日　6 月 2 日(日)

	A 会場 (936)	B 会場 (935)	C 会場 (934)
セッション 3 9:30 – 11:00 (10:30)	パネル (大学・学部案内の批判的ディスコース分析) 〈川野・郭・伊藤、平野、 師岡、清宮〉 司会：宮原	研究発表 4 （オンラインコミュニケーション） 〈小島・宮曽根、八代・白坂〉 司会：宮崎	談話室
セッション 4 11:10 – 12:40	東北支部パネル ウェルビーングについて 〈宮曽根、関、川内、 五十嵐、小林〉 司会：小林	研究発表 5 （コミュニケーション学の領野） 〈谷島、宮脇、藤巻〉 司会：田島	研究発表 6 （コミュニケーション理論の更新） 〈河村、小坂、小川〉 司会：菅野

Schedule

Day 1 Saturday, June 1

	Venue A (936)	Venue B (935)	Venue (934)
Session 1 10:00 – 11:30	Symposium by Tohoku Chapter Regions and Well-Being 〈Miyasone, Kanai, Nise〉 Chair: Miyasone	Presentation 1 （Discourse & Communication） 〈Kiyomiya, Cho & Morisaki, Kaku〉 Chair: Takanaga	Conference Room for JCA members
Chapter Meeting & Lunch 11:40 – 12:30	Hokkaido (Room 936), Tohoku (Room 936), Kanto (Room 936), Chubu (Room 935), Kansai (Room 935), Chugoku-Shikoku (Room 934), Kyushu (Room 934)		
Session 2 12:45 – 14:15 (13:45)	Panel organized by Kansai Chapter （Communication Biblio Battle） 〈Morisaki, Hidaka, Moriguchi, Nojima〉 Chair: Koyama	Presentation 2 （Communication Practice） 〈Walgrave & Shibuya, Jodoi〉 Chair: Morooka	Presentation 3 （Rhetoric and Public Discourse） 〈Aonuma, Tajima, Azuma〉 Chair: Matsumoto
Venue D（937） for General Assembly, Keynote Address, and Symposium			
General Assembly 14:30 – 15:15	**General Assembly** MC： Aya Matsushima Opening Remark: Seiichi Morisaki (JCA president)		
Keynote Address 15:30 – 16:30	**Keynote Address (open to the public)** Speaker: Norio AKASAKA		
Symposium 16:40 – 17:50	**Symposium (open to the public)** Panelist：Norio AKASAKA (folklorist) Yuko Kawai (Rikkyo University) Mitsuhiro FUJIMAKI (Ferris University） MC: Katsuyuki HIDAKA (Ritsumeikan University)		
Conference Reception 18:15-20:00			

Day 2　Sunday, June 2

	Venue A (936)	**Venue B (935)**	**Venue C (934)**
Session 3 9:30 – 11:00 (10:30)	Panel (Critical Discourse Analysis of University Pamphlets) 〈Kawano, Kaku & Ito, Hirano, Morooka, Kiyomiya〉 Chair: Miyahara	Presentation 4 （Online Communication） 〈Kojima & Miyasone, Yashiro & Shirasaka〉 Chair: Miyazaki	Conference Room for JCA members
Session 4 11:10 – 12:40	Panel by Tohoku Chapter (Well-Being) 〈Miyasone, Seki, Kawauchi, Igarashi, Kobayashi〉 Chair: Kobayashi	Presentation 5 （Expanding Comm. Studies） 〈Tanishima, Miyawaki, Fujimaki〉 Chair: Tajima	Presentation 6 （Updating Comm. Theories） 〈Kawamura, Kosaka, Ogawa〉 Chair: Kanno

6 月 1 日（土） Saturday, June 1 15:30-16:30

学　術　講　演　Keynote Address

講演者：赤坂　憲雄

東北学　地域の記憶を掘るために

わたしは一九九〇年代半ばに、東北学という名の知の運動を山形から起ちあげている。それ以来、それぞれの地域に埋もれている記憶や物語をいかに掘り起こすか、というテーマを変わらず追究してきた。それはあくまで、そこに生きる人々が内発的に、かつ実践的に取り組むべき知の協同作業であることを、理念として掲げてきた。その成果は主として、雑誌や著作などの活字媒体のなかに表現されている。東日本大震災のあとの混沌の季節を潜り抜けながら、わたし自身の東北学の最終章の舞台として、奥会津という地域を選ぶことになった。わたしはそこで、多くの仲間たちとともに会津学研究会という学びの場を創り、運営してきた。奥会津はいま、厳しい過疎化と少子高齢化の波に洗われて、千人の村や町が眼前の出来事と化しつつある。二年ほど前から、「奥会津ミュージアム」という施設を持たぬ、いわばデジタル・ミュージアム／エコ・ミュージアムを融合させた博物館を起ちあげ、運営を始めている。人材も予算もきわめて限界がある、というマイナスの条件を逆手に取って、この幻のミュージアムはしたたかに・しなやかに、思いも寄らぬ千人の村々から文化創造をめざす広場へと成り上がろうとしている。

【経歴】

赤坂　憲雄（あかさか　のり）　AKASAKA, Norio

民俗学者。1953 年東京都生まれ。東京大学卒。東北芸術工科大学教授、同大学東北文化研究センター所長、学習院大学教授などを歴任し、東日本大震災復興構想会議委員も務めた。著書に、『異人論序説』（ちくま学芸文庫）、『境界の発生』（講談社学術文庫）、『排除の現象学』『東北学／忘れられた東北』『岡本太郎の見た日本』『象徴天皇という物語』（岩波現代文庫）、『武蔵野をよむ』（岩波新書）、『性食考』『ナウシカ考』（岩波書店）、『奴隷と家畜』（青土社）、『災間に生かされて』（亜紀書房）など。

今回の基調講演は一般公開され、会員資格や年次大会参加登録の有無を問わず、誰でも無料でご参加いただけます（要事前予約）。

6 月 1 日（土） Saturday, June 4 16:40-17:50

＜シンポジウム＞

地域と記憶

司会：日高　勝之（立命館大学）
シンポジスト：赤坂　憲雄
河合　祐子（立教大学）
藤巻　光浩（フェリス女学院大学）

学術講演を受けて行われる本シンポジウムでは、講演者の赤坂先生に加え、2 名の JCA 会員に登壇いただき、本年度の年次大会テーマである「地域と記憶」を巡る諸問題について、フロアの参加者からの意見も交え、建設的なコミュニケーションを展開したい。

今回のシンポジウムは一般公開され、会員資格や年次大会参加登録の有無を問わず、誰でも無料でご参加いただけます（要事前予約）。

6 月 1 日（土） Saturday, June 1 11:40-12:30

支部会議 Chapter Meetings

各支部でミーティングを行います。部屋割りについてはスケジュール表をお確かめ下さい。
Chapter meetings will be held in the assigned rooms, as listed on the schedule of events.

6 月 1 日（土） Saturday, June 1 14:30-15:15

総 会 General Assembly

司 会：松島 綾 （立命館大学・日本コミュニケーション学会事務局長）

開会の辞：守﨑 誠一 （関西大学・日本コミュニケーション学会会長）

6 月 1 日（土）　Saturday, June 1

時間	会場	プログラム　Session
10:00 ｜ 11:30	A 会場 (936)	＜セッション　１＞ 東北支部企画シンポジウム　Symposium 地域とウェルビーング―まちづくりと地域コミュニティの観点から― 宮曽根　美香（東北工業大学） 金井　辰郎（東北工業大学） 二瀬　由理（東北工業大学）
	B 会場 （935）	研究発表 1（ディスコースとコミュニケーション）　Presentation 1 1. 震災復興下の七人の女将たち ―ディスコース分析によるアイデンティティの考察― 清宮　徹（西南学院大学） 2. 日本と中国における結婚の歴史的変遷と日中間国際結婚研究への展望 張　馨文（関西大学） 守崎　誠一（関西大学） 3. 「相互の意味付け」を通して見る日本の若者の友人関係におけるコンフリクト行動 郭　仁敬（西南学院大学大学院）
	C 会場 （934）	談話室
11:40 ｜ 12:30	936 教室 936 教室 936 教室 935 教室 935 教室 934 教室 934 教室	支部会議　Regional Chapter Meetings 北海道支部　Hokkaido 東北支部　Tohoku 関東支部　Kanto 中部支部　Chubu 関西支部　Kansai 中国四国支部　Chugoku & Shikoku 九州支部　Kyushu
12:45 ｜ 14:15 (13:45)	A 会場 (936) *14:15 終了	＜セッション　２＞ 関西支部企画パネル　Panel Discussion コミュニケーション、私にとってのこの一冊 ―コミュニケーション学に関連して、自身に影響を与えた／ 授業に使える／学生に勧めたい一冊の（ビブリオ・バトル風）紹介― 司会：小山哲春（京都ノートルダム女子大学） 登壇：守崎　誠一　(関西大学) 日高　勝之　(立命館大学) 森口　稔　(京都外国語大学) 野島　晃子　(平安女学院大学)

時間	教室	プログラム Session
12:45 ｜ 14:15 (13:45)	B 会場 (935) *13:45 終了	研究発表 2（コミュニケーション実践） Presentation 2 1. From English Communication to English/Communication —A Case Study in Embedded Communication Interventions— Eli Walgrave (Miyagi Gakuin Women's University) Fumie Shibuya (Tohoku Bunka Gakuen University) 2. 競技ディベートの持続可能性に関する考察 上土井　宏太（鹿児島大学）
	C 会場 (934) *14:15 終了	研究発表 3 (レトリック・公的言論) Presentation 3 1. レトリックとしての法的フィクション 青沼　智（国際基督教大学） 2. 地球環境保護に対峙する日本の超越的レトリック —国内清涼飲料メーカーの 2030 年目標のペットボトルリサイクル目標を対象に— 田島慎朗（関西大学） 3. ハマス・イスラエル衝突に関する日本の報道状況—ウェブを用いた言語学的分析— 東照二（米国ユタ大学世界言語文化学部）
14:30 ｜ 15:15	D 会場 (937)	総会 General Assembly 司会：松島　綾　（立命館大学） 開会の辞：守崎　誠一　（関西大学・日本コミュニケーション学会会長）
15:30 ｜ 16:30	D 会場 (937)	基調講演 Keynote Address 基調講演者：赤坂　憲雄 司会：小西 卓三（昭和女子大学・日本コミュニケーション学会学術局長）
16:40 ｜ 17:50	D 会場 (937)	シンポジウム Symposium 「地域と記憶」 シンポジスト：赤坂　憲雄 河合　優子（立教大学） 藤巻　光浩（フェリス女学院大学） 司会：日高　勝之（立命館大学）

6 月 2 日（日）　Sunday, June 2

時間	教室	プログラム Session
9:30 ｜ 11:00 (10:30)	A 会場 (936) *11:00 終了	＜セッション　３＞ パネル　大学・学部案内の批判的ディスコース分析　Panel Discussion 司会：宮原哲（西南学院大学） 発表①発表者：川野優希（立教大学大学院）・郭仁敬（西南学院大学大学院）・伊藤萌紅（メリーランド大学大学院） 発表②発表者：平野遼（立教大学大学院） コメンテーター：師岡淳也（立教大学）、清宮徹（西南学院大学）
	B 会場 (935) *10:30 終了	研究発表 4（オンラインコミュニケーション）　Presentation 4 1. オブジェクト指向コミュニケーションモデルと教育―　いじめ・不登校の問題に対応して　― 小島　正美（東北工業大学） 宮曽根　美香（東北工業大学） 2. オンラインにおける営業担当者の視覚的イメージと音声の組み合わせが顧客の関心に与える影響 八代　華代子（慶應義塾大学大学院博士課程） 白坂　成功（慶應義塾大学大学院）
	C 会場 (934)	談話室
11:10 ｜ 12:40	A 会場 (936)	＜セッション　４＞ パネル　東北支部パネル　Panel Discussion ウェルビーイングについて―東北支部の取り組み― 宮曽根　美香（東北工業大学） 関　久美子（新潟青陵大学短期大学部） 川内　規会（青森県立保健大学） 五十嵐　紀子（新潟医療福祉大学） 小林　葉子（岩手大学）
	B 会場 (935)	研究発表 5（コミュニケーション学の領野）　Presentation 5 1.「チャンネル登録お願いします」のメタ語用論の試み ―指標性と接触の概念を手掛かりに― 谷島　貫太（二松学舎大学） 2.　アフォーダンス理論から考えるコミュニケーションとモノ　―ぬいぐるみを事例として― 宮脇　かおり（桃山学院大学） 3. 領土・主権展示館とその名称役割について ―「日本固有の領土」としての北方領土とそのイマジナリー　― 藤巻光浩（フェリス女学院大学）

時間	教室	プログラム Session
	C 会場 (934)	研究発表 6（コミュニケーション理論の更新） Presentation 6 1. コミュニケーションとしての対話を再定義する —「四象限の対話モデル」の意義と検討— 河村　まい香（明治大学） 2. ボームとヴィゴツキーの接点を探る —対話統合モデルの構築を目指して— 小坂　貴志（東京国際大学） 3. 陰謀論研究の歴史 —陰謀論の学際性と向き合う— 小川　凜（明治大学）

発表要旨

6 月 1 日（土） Saturday, June 1 10:00-11:30 Session 1

A 会場	**シンポジウム**
Venue A	**Symposium**

JCA 年次大会東北支部企画シンポジウム
地域とウェルビーイング
―まちづくりと地域コミュニティの観点から―

宮曽根　美香（東北工業大学）
金井 辰郎（東北工業大学）
二瀬 由理（東北工業大学）

まちづくりと地域コミュニティの観点から地域とウェルビーイングについて３名のシンポジストが語る。最初に仙台市の将来像を、市民への Web アンケートとインタビュー調査に基づき心理学・コミュニケーション学・経済学の視点から研究を報告する。この調査では「主観的幸福感尺度」(伊藤ら,2003)のうちの 12 項目で主観的幸福度を、介護・医療・交通・コミュニティネットワークに関する生活満足度も測定し、その関連性を分析した。その結果、仙台市民の多くが家族の豊かさを重視していること、幸福度と地域の医療サービスについての満足度は関連があること、幸福度とコミュニティネットワークにおける社会的交流も関連があることが示された。2 地域居住に関するアンケート調査結果についても言及する。

社会全体のウェルビーイングを高めるためには、地域コミュニティが一人ひとりのウェルビーイングを実現する場でなければならない(坂倉, 2023)。次に、地域コミュニティがウェルビーイングという価値観の社会的浸透を通じてどのような変容を遂げるのか、その可能性について地域活動他の参与観察を踏まえ論じる。ウェルビーイングが重視されると個々人の地域コミュニティに対する意味の変容が起こる。外部評価よりも質的な充実や内面的な充足感を重視し、地域の課題解決のための活動よりも楽しさ、組織よりも個人的ネットワークを重視するようになる。地域コミュニティに関わることがアイデンティティーに変化をもたらし、充実感や記憶につながることで地域コミュニティとしての本来感を高める可能性がある。

引用文献

板倉杏介 (2023)「ウェルビーイング社会における地域コミュニティ」『社会システム変容の研究と有識者のコラム集』NTT 社会情報研究所.

伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至 (2003) 「主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討」, 『心理学研究』, 74(3):267-81.

6 月 1 日（土） Saturday, June 1 10:00-11:30 Session 1

B 会場	研究発表 1	ディスコースとコミュニケーション
Venue B	Presentation 1	Discourse and Communication

震災復興下の七人の女将たち

―ディスコース分析によるアイデンティティの考察―

清宮　徹（西南学院大学）

本研究発表の目的は、東日本大震災の復興過程における女性のコミュニティ・リーダーが危機やその後の復興に対してどのような役割を果たしたか、そのコミュニケーションの過程を考察することにある。安定した社会・経済活動とは異なる危機と復興の状況下、女将(主に宿泊業)の社会的な活動とコミュニティ内外の関係性の発展から得られる知見を考察する。女将の役割はそもそも通常の民間企業の階層的な組織構造とは異なり、組織コミュニケーションの視点から興味深い研究トピックである。本研究は、危機と復興における女将のコミュニケーションが、どのように地域や外部との関係を発展させ復興に寄与しているか、とくに女将が震災前と後でどのように変わったかに焦点を当てる。データは東日本大震災の被災地(主に宮城県北部)のフィールドワークをもとに、2018 年と 2023 年に行った 6 件の宿泊業及び 1 件のマリンスポーツショップの女将とのインタビューである。女将たちのナラティブをもとに、女将という専門職的な視点と女性という立場からディスコース分析を行う。本研究からの重要な示唆は、女将のアイデンティティの形成・変化である。女将たちのディスコースは、地域社会全体を再建させることを通じて自分たちのビジネスを活性化させるというアイデンティティ・ワークを示している。女将としてのプロフェッショナルなアイデンティティとジェンダー・アイデンティティという「複合的なアイデンティティ」が交差し、アイデンティティ・ワークが展開された。それが結果的に、女性のエンパワーメントに繋がっていることに着目する。震災復興における女将というユニーク役割について、ディスコースとアイデンティティを分析することで、コミュニティ・リーダーシップの側面とジェンダーの側面を議論する。

日本と中国における結婚の歴史的変遷と日中間国際結婚研究への展望

張　馨文（関西大学）
守﨑　誠一（関西大学）

本研究では、日本と中国の結婚事情について歴史的に概観し、近年の結婚難の要因について検討した上で、日中間の国際結婚の今後の可能性と研究すべき課題について論じる。

日本では、明治時代から見合い結婚が主流であり、第二次世界大戦後に恋愛結婚が広まったが、好調な経済環境や人々の間での積極的な結婚相手の紹介によって「皆婚」の状態が生まれた。しかし 2000 年代になると、経済不況による雇用の不安定化や性革命により、晩婚化と非婚化が進行した。

中国における結婚も、かつては親や親族の意思に基づく見合い結婚が主流であったが、1949 年に中華人民共和国が成立すると婚姻法が制定され、結婚が本人の自由意志に基づいておこなわれるようになった。その後、1980 年から実施された改革開放政策により、経済が大きく成長することで、女性が配偶者を選択する際に金銭的条件が重視されるようになった。特に、結婚において男性が住宅を提供できるかが注目されるようになり、大都市における住宅価格の高騰が、結婚適年齢を過ぎても結婚できない「剰男」「剰女」を生むことになった。

日中間の国際結婚は、1980 年末から 1990 年代の日本のバブル崩壊期と中国の改革開放の時期に、経済的理由で結婚できない農山村に住む日本人男性が、経済的な上昇婚を求める中国人女性と仲介型の国際結婚をしたことに始まる。2000 年代になると、日本に留学する中国人が急増し、その中には卒業・修了後に日本で就職し、日本人男性と出会い、結婚して日本に永住する中国人女性も現れた。しかし、仲介型の国際結婚とは異なり、そのような女性たちを対象とする研究はまだ十分におこなわれていない。具体的には、日本人男性との結婚の目的、結婚生活の中で直面している問題、夫との家事・育児と仕事の分担・両立、子どもに対する中国文化・言語の継承、といったことについて研究をおこなっていく必要がある。

「相互の意味付け」を通して見る日本の若者の友人関係におけるコンフリクト行動

郭　仁敬（西南学院大学大学院）

コンフリクト（対立）・コミュニケーション研究は、長年の間、西洋の価値観や学術的基盤に依拠して展開されてきた。西洋基盤の理論や概念をそのまま日本のコンテキストに適用すると、日本人のコミュニケーションが正確に理解されない恐れがある。既存の理論やモデルの限界を克服し、日本的コミュニケーションの理論化を目指すには、行動の背景にある人々の認識や態度を研究することが不可欠である。

本研究では、シンボリック相互作用論を理論的視座に据え、日本の若者の友人関係におけるコンフリクト行動を探求する。日本の若者の友人関係に関しては、互いの気持ちを傷つけず、関係を壊さないことに重点を置く傾向があり、それによる息苦しさや悩みを抱えた若者の存在が指摘されている。コンフリクトは双方の面子や人間関係に対する脅威であることから、人は自分の能力や経験を最大限に生かしてコンフリクトに対処する。したがって、コンフリクトを研究の軸とすることで、日本の若者の人間関係やその背後にある態度を詳細に明らかにできると考えられる。

本研究は、人がものごとに付与する「意味」に焦点を置き、日本の若者のコンフリクト行

動を文化固有の枠組みで分析、研究するイーミック（emic）な視点から捉え直すことを試みる。そのため、エスノグラフィーを採用して参与観察や深層インタビューを行った。

その結果、Dual Concern Model におけるコンフリクト対処方法（競争型・回避型・同調型など）とコンフリクトの捉え方は、日本の若者のコンフリクト行動に適用するうえで限界があることが分かった。さらに、日本の若者は、自らのコンフリクトに対する意味付けに応じて行動や認識が異なることに加え、相手や相手との関係に付与した意味によって違う行動をする傾向があることも明らかになった。以上より、日本的コミュニケーション研究を発展させるにあたって、人々が事象に与える「意味」に焦点を当てる重要性や意義が示唆された。

6 月 1 日（土） Saturday, June 1 12:45-14:15 Session 2

A 会場	**パネル**
Venue A	**Panel Discussion**

コミュニケーション、私にとってのこの一冊
―コミュニケーション学に関連して、自身に影響を与えた／授業に使える／学生に勧めたい一冊の（ビブリオ・バトル風）紹介―

司会・登壇：
小山哲春（京都ノートルダム女子大学）
登壇：
守崎 誠一 (関西大学)
日高 勝之 (立命館大学)
森口 稔 (京都外国語大学)
野島 晃子 (平安女学院大学)

コミュニケーション研究において、通事的・共時的に常に変化する一次データを観察・分析し、 新しい知見を産み出すことの重要性は論を俟ちません。同時に、ひとりのコミュニケーション研究者／教育者／学習者としての私たちは、他の多くのコミュニケーション研究者の肩の上に立っているわけであり、研究者が拠って立っているそれぞれの巨人の異なる姿・形こそが、その独創的な研究を可能にしてくれているとも言えます。

本企画では、普段聞く機会のない、他のコミュニケーション研究者の「コミュニケーション学に関連して、自身に影響を与えた本、授業に使える本、学生に勧めたい特別な一冊」のビブリオ・バトル風（すなわち、語り手の個人的な思いを込めた）紹介を行います。通常の書評からは得られない新しい知見を得ることで、コミュニケーション教育者／研究者／学習者として視点を広げると同時に、自身のコミュニケーションに関する知的関心の所在を再確認する機会を提供できればと思います。

6 月 1 日（土）　Saturday, June 1　12:45-13:45　Session 2

B 会場	**研究発表 2**	**コミュニケーション実践**
Venue B	**Presentation 2**	**Communication Practice**

From English Communication to English/Communication
—A Case Study in Embedded Communication Interventions—

Eli Walgrave (Miyagi Gakuin Women's University)
Fumie Shibuya (Tohoku Bunka Gakuen University)

This participatory case study explores embedding communicative competence interventions within a university general education English language course. While this intervention plan was carried out in several classes, this project focuses on a single class of second-year Speech and Language Therapy students. Despite the focus on treating communication problems, speech therapists often receive very little pre-service communication training. This can result in problems both in the transition into the professional world as well as in other social situations. The basic design of the class utilizes Emmanuel Guardiola's Gameplay Loop Design Methodology, a tool from the field of game design, as a basis. Using open questions and focused dialogue, students were guided to think about open experiential and opinion-based questions and express those ideas to one another in English. At the end of the class, students were asked to answer feedback responses relating to their opinions about the class. This feedback was analyzed for themes relating specifically to communication, rather than English language skills. Likewise, students' behavior during class was also observationally analyzed for changes in communicative behavior. This particular class offered a unique opportunity for analysis, as the feedback responses could then be compared to observational data collected by their homeroom instructor. Students showed a positive response to the intervention and perceived their own communication skills as having grown. This feedback agrees with observations both within and outside of the classroom. The results of this intervention show promise for developing communicative competence among students.

競技ディベートの持続可能性に関する考察

上土井　宏太（鹿児島大学）

本研究は、ディベート人口の減少に対応し、ディベートを継続する大学生のモチベーションとその要因を探ることを目的とした。ディベートは、近年、特に大学レベルでの参加者が減少している。例えば、日本ディベート協会（JDA）が主催する JDA 秋季大会の参加チーム数は、過去 25 年間で大幅に減少している（日本ディベート協会, 2023）。これまで、大学生以上のディベート経験者が高校生以下のディベートの指導やジャッジを行ってきた背景があり、教室ディベートを行う観点からも競技ディベート人口の維持は課題であり、現役でディベートを行っている大学生を対象として、ディベートに対するモチベーションの変化について調査を行った。

調査方法は、A 大学の English Speaking Society（ESS）の Debate section に所属する現役ディベーター6 名と、同セクションの運営責任者を務めた 3 名に対して半構造化インタビューを行った。ディベーターへのインタビューでは、ディベートを始めたきっかけ、継続するモチベーション、性別の影響、モチベーションの変化などを、運営責任者には新入生の勧誘やモチベーション維持の取り組みについて聞き取りを行った。

結果として、ディベーターのモチベーションには高校時代のディベート経験が影響を与えていることが明らかとなったが、この影響は個人によって異なり、一部の学生にとってはモチベーションの源となったのに対し、他の学生にとってはそうではないケースも見られた。また、部内の人間関係や大会への参加がモチベーションを変化させる要因であることも明らかとなった。運営責任者へのインタビューでは、新入生を引きつけるための工夫や、ディベートの面白さや有用性を伝えることが、長期的な参加を促す要因として挙げられた。

これらの結果から、競技ディベートの将来に対する展望として、ディベート経験者のモチベーション維持や新入生の勧誘に焦点を当てることの重要性が示唆された。また、大学以外のディベート団体の運営においても、これらの知見が応用できる可能性がある。発表当日には、具体的な学生の発話内容を紹介し、これらの結果を踏まえた競技ディベートの未来について議論を行う。

引用文献

日本ディベート協会（2023）「これまでの大会結果」
https://japan-debate-association.org/contest/history（閲覧日：2024 年 1 月 28 日）.

6 月 1 日（土） Saturday, June 1 12:45-14:15 Session 2

C 会場	**研究発表 3 レトリック・公的言論**
Venue C	**Presentation 3 Rhetoric and Public Discourse**

レトリックとしての法的フィクション

青沼 智（国際基督教大学）

法的フィクションとは、現実世界では事実ではないもの・ことを法律上の現実として扱い、一定の法律効果を付与させる立法技術の一つである。「フィクション的なものは、その存在を—実際にはありえないが、必ずあるとされる存在を—言語に、そして言語のみに負う」（Ogden, 1932, p.15）。表象すなわち実存たる法的フィクションは単なるフィクションではない。法律効果・拘束力を持ち、社会的現実・規範をも生成し得るレトリカルな存在である。本研究はこの自らの存在を法という言語のみに負うという極めてレトリカルな存在である法的フィクションに焦点を当て、レトリックと法との関係のより多面的な理解を目指す。具体的には、法的フィクションの典型である、モノや概念等、現実には人ではないものが法律上の人となり人として扱われる事象すなわち「法人」、特に法人格が付与された「会社」および「AI（人工知能）」のレトリック性、またそのレトリカルな（潜在）力による現実創造・規範生成のプロセスについて考察する。まず会社については、経営者また構成員等から切り離された人格を法人に認めた英国の判例、加えて法人の「人権共有主体性」を肯定した国内の判例で展開された議論を整理し、比較分析する。また AI については、法人化に関する立法また判例がまだない故、既存の法解釈に関する法律家・法学者の論考・議論を検討する。

引用文献

Ogden, C. K. (1932). *Bentham's theory of fictions*. Routledge.

地球環境保護に対峙する日本の超越的レトリック
—国内清涼飲料メーカーの 2030 年目標のペットボトルリサイクル目標を対象に—

田島慎朗（関西大学）

本発表では、ケネス・バークのレトリック的超越性（Rhetorical transcendence）の概念を基調として、日本国内の清涼飲料メーカーのペットボトルリサイクルに向けた取り組みについての文書を分析する。プラスチックを含むペットボトルのリサイクルは、持続可能な開発目標、いわゆる SDGs に関連する価値観が浸透するにしたがい、国内メーカーに求められる規範となってきた。文書に代表されるペットボトルリサイクルの言説には、近年グローバルな規模で起こってきたプラスチックごみ問題や燃焼にともなう地球環境被害、あるいはリサイクルにともなう様々な人的・金銭的な負担を解決できることをほのめかすような技術開発とその実現を示唆するような文言やイメージが並ぶ。内容を厳密に吟味すると疑義が浮かぶこともあるが、それらのメッセージは往々にして社会に歓迎されているようだ。

発表では、プラスチックとペットボトルのリサイクルについての科学的文書にみてとれる厳密な検証を弁証法的（dialectic）なものと理解したうえで、清涼飲料メーカーの文書にみてとれるレトリックは超越性があると主張する。分析の対象は、日本国内での販売ランキング上位で、清涼飲料水をビジネスの中核としていると思われるサントリーHD、コカコーラボトラーズジャパン、そして伊藤園の三社のものを中心とする。特に取り上げるのは、各メーカーの水平リサイクル、いわゆるボトル to ボトルされたペットボトルについての表現と、「植物由来ペットボトル」についての文書内における取り扱われ方である。これらのトピックについて、発表では、文書にあるクリーンで持続可能なイメージが、各メーカーの掲げる「目標」を科学的にどのように実現するのかという科学的争点を包括し、未来の困難を読者と共に乗り越えることで超越性がレトリカルに実現されていると論じる。

ハマス・イスラエル衝突に関する日本の報道状況
―ウェブを用いた言語学的分析―

東照二（米国ユタ大学世界言語文化学部）

日本では、国政で政治資金問題が大きな争点となっている。また世界に目をやれば、ウクライナ・ロシアの紛争問題、また中東ではハマス・イスラエルでの極めて大きな紛争、衝突、攻撃が多発しており、世界を巻き込んで、重大な世界問題となっている。

本研究では、ハマスとイスラエルの紛争に焦点を当てて、特に、日本のマスコミ、報道、政府がどのように対応、評価を下しているのか、言語学的な観点から、考察してみることにする。

概して、日本のマスコミ、中東研究者の発言を中心とした評価について、一定の考察、もっという

と、大きな問題点を挙げることができる。それは、次の二つの点に集中しているように見受けられる。一つ目は、ハマスをパレスチナを代表する組織として捉え、ハマスは民主、市民への奉仕活動なども手掛ける、どちらかといえば肯定的な団体とみなす主張である。二つ目は、マスコミを含めた日本の報道姿勢が、テレビ、新聞などの表現に見られるように、ガザ地区で一体何が起こり、どうなっているのかの、具体的な事実に基づいた報道が正確になされていない（現時点ではマスコミ関係者はガザ地区に入ることはできない)、という点である。

これらを検証するために、本研究では、中東研究の専門家である飯山陽（あかり）教授の論点を、賛否両論のある飯山氏のユーチューブ解説を言語学的に検討してみることとする。特に、言語学の専門家たちが主張するところの、話者、聞き手をともに共同で巻き込むようなスピーチスタイル（Involvement Strategy）を基調に研究した場合、どのような論点を上げることができるか考察してみることとする。こうすることによって、マスコミなどの報道、また新しいインターネットでの発信などが、今後の研究課題となっていくことを目的とする。

6 月 2 日（日） Sunday, June 2 9:30-11:00 Session 3

A 会場	**パネル**
Venue A	**Panel Discussion**

大学・学部案内の批判的ディスコース分析

司会：宮原哲（西南学院大学）

発表①発表者：川野優希（立教大学大学院）

郭仁敬（西南学院大学大学院）

伊藤萌紅（メリーランド大学大学院）

発表②発表者：平野遼（立教大学大学院）

コメンテーター：師岡淳也（立教大学）

コメンテーター：清宮徹（西南学院大学）

本パネルは、大学が発信するテクストを分析の対象とした 2 つの批判的ディスコース分析（Critical Discourse Analysis: CDA）を通して、少子高齢化、産業構造の変動、グローバル化の進展など大学を取り巻くさまざまな環境の変化に注目しながら、大学教育に内在化する課題を明らかにすることを目的とする。大学における新自由主義的イデオロギーの影響による市場化やそれに伴ったコミュニケーション能力の育成の促進に対する批判は、政府や文部科学省など行政のディスコースを対象として論じられることが多く、大学教育の主体である大学が発信するメッセージを取り上げて分析したものはあまり多くない。

そこで本パネルでは、まず、第一発表者である川野・郭・伊藤が大学案内パンフレットを分析し、新自由主義的イデオロギーが大学の教育と運営・施策にもたらす影響について議論する。つづいて第二発表者の平野は、大学が提示するアドミッション・ポリシーにおける「コミュニケーション能力」について、文部科学省・受験生・社会と大学とのそれぞれの関係性に着目して分析する。大学・学部案内の批判的ディスコース分析を活用した 2 つの発表を通して、高等教育機関としての使命を持つ大学が果たすべき役割について、コミュニケーション学の視点から議論したい。

なお、本パネルは、発表原稿に事前に目を通した 2 名のコメンテーターが、各発表について講評を行ない、その後に全体での質疑応答および議論に移る。議論では、司会から提示される本パネルの内容に関連するいくつかの議題について、発表者、コメンテーター、フロアが複数のグループに分かれて話し合いをした後、全体での意見の共有を行なう。

オブジェクト指向コミュニケーションモデルと教育
― いじめ・不登校の問題に対応して ―

小島　正美（東北工業大学）
宮曽根　美香（東北工業大学）

コロナ禍で児童・生徒のいじめ・不登校は深刻化し、そこには二つの課題がある。一つは児童・生徒から相談を受けた教職員による抱え込みである。二つ目は、いじめ相談を受けた側のいじめ・不登校対応チームがいじめの重大事態として認識できなかったことである。それを解決するためのオブジェクト指向コミュニケーションモデルを JCA2023 年度東北支部第 24 回研究大会で提案した。

本研究は、重大事態となっている 44%はいじめと認知されていない点を重要視した。2000 年代以降は、児童・生徒間のコミュニケーション形態がインターネットの普及により、スマートフォンなどの情報端末に依存するようになり、いじめの性質が異なっている。いわゆるネットいじめは、児童生徒が学校に居るときだけでなく、家庭に帰っても 24 時間継続することになる。学校において、現在のような陰湿なネットいじめを見つけることは困難である。そのため、児童・生徒のいじめ・不登校問題は、学校、家庭、地域のグループで連携しながら何が問題かを検討する必要がある。

これらの問題を解決するモデルとして、ANT（Actor Network Theory）と OMT（Object Modeling Technique）を取り上げ、その中でモデル化しやすい OMT によるコミュニケーションモデルを適用した。モデル構築は、初めに学校、家庭、地域ごとにオブジェクトの洗い出しを行い、それぞれからクラスを抽出し、オブジェクト「先生」―オブジェクト「児童」、オブジェクト「親」―オブジェクト「子ども」、オブジェクト「地域大人」―オブジェクト「地域子ども」との関係を導き出した。いじめ事象を対象とした学校・家庭・地域におけるオブジェクト指向コミュニケーションモデルにおいてクラス間の関係を示し、学校、家庭、地域が連携して取り組むオブジェクト指向コミュニケーション教育を考察する。

オンラインにおける営業担当者の視覚的イメージと音声の組み合わせが顧客の関心に与える影響

八代　華代子（慶應義塾大学大学院博士課程）
白坂　成功（慶應義塾大学大学院）

ビジネスコミュニケーションのデジタル環境が進化する一方で、営業担当者が顧客に対して行う効果的なオンラインコミュニケーションについての学術的な知見は、対面より不足している。Covid-19 のパンデミックを機にオンライン商談が普及した今、営業担当者のツール上の非言語情報が顧客の関心に与える影響を明らかに必要がある。本研究の目的は、オンラインツール上での営業担当者の視覚的イメージと音声の組み合わせが提案に対する顧客の関心に与える影響を実験により明らかにすることである。

設定は、営業担当者として男女 1 名ずつの実験協力者が、顧客としての参加者 1 名に対して、Zoom で家電モニターの募集を行う。まず、提案を受ける前に 107 名の参加者がその概要を読んで、関心があるか、ないかを名義尺度で評価した。次に、8 群に分けた参加者が、視覚的イメージと音声を組み合わせて編集した 6 パターンの動画（視覚的イメージ 3 種類：「名前」、「無表情のプロフィール写真」、「笑顔のプロフィール写真」×音声 2 種類：「無表情の顔で話した声」、「顔に表情をつけて話した声」）を視聴した。各組合せ動画を視聴後、再度、この提案に関心があるか、ないか、名義尺度で評価。クロス表に基づき、マクネマー検定で分析を行った。

その結果、6 パターンの動画すべてにおいて、視聴する前後で顧客の関心に有意な差が認められた。これは、オンラインツール上の視覚的イメージと音声の組み合わせが顧客の関心に影響を与える可能性を示唆している。よって、営業担当者は、オンラインツールを使って提案や商談をするときは、視覚的イメージと音声の組み合わせを慎重に考慮する必要がある。影響を与えた具体的な要因については、今後、アンケートの自由記述の分析を進めて明らかにする。本研究は、オンラインにおいて顧客の関心をつかむ効果的なビジネスコミュニケーションの実現に寄与することができると考えている。

6 月 2 日（日）　Sunday, June 2 11:10-12:40　Session 4

A 会場	**パネル**
Venue A	**Panel Discussion**

ウェルビーイングについて　―東北支部の取り組み―

宮曽根　美香（東北工業大学）
関　久美子（新潟青陵大学短期大学部）川内　規会（青森県立保健大学）
五十嵐　紀子（新潟医療福祉大学）
小林　葉子（岩手大学）

支部メンバーが各領域からの研究調査報告を行い、ウェルビーイング（Well-being 以降 WB）の現状と課題についてパネルディスカッションを行う。

「ヨガと WB」（宮曽根）

WB は肉体的・精神的・社会的に満たされた状態を指し、Career・Social・Financial・Physical・Community WB の 5 要素から成り立つ。Seligman の PERMA モデルでは、ポジティブ感情、没頭、人間関係、生きる意味、達成の 5 領域から捉えている。ヨガと WB のアンケート調査では、ヨガを始めた後の幸福度が有意に上昇しており、ポジティブ感情や生きる意味と関連していることが示された。

「ヒューマンライブラリーと WB」（関）

ヒューマンライブラリーでは、マイノリティ的背景を持つ人々が「本」となり、自身の過去の経験や生きづらさについて参加者と対話する。「本」として語ることは容易ではないが、何が彼らを語らせるのか。ヒューマンライブラリーに参加することが、彼らの中の WB　とどう関係しているか紐解いていきたい。

「医療現場の言語サポートと WB」（川内）

WB の基本的概念の中の「幸福」を考えた時、肉体的健康も精神的健康もどちらも大切であり、医療現場で重要な情報が「理解できている」ことが、身体的治療のみならず、精神的な健康にもつながるといえる。医療現場における情報保障の視点から、外国人患者に対する言語的サポート役の医療通訳の現状と課題について、WB の視点から考えていく。

「医療福祉と WB」（五十嵐）

健康寿命は、ペットを飼育している人の方が長いという報告もあるように、飼い主の WB を構成する大きな要素になっている。一方で、諸事情からペットの飼育崩壊に陥り、地域社会で孤立する人々がいる。社会的に孤立した人々の支援は複合的な問題があり困難ではあるが、飼育支援を通じて失われた WB を再び見出そうとする取り組みについて報告する。

B 会場	**研究発表 5**　**コミュニケーション学の領野**
Venue B	**Presentation 5　Expanding Communication Studies**

「チャンネル登録お願いします」のメタ語用論の試み
―指標性と接触の概念を手掛かりに―

谷島　貫太（二松学舎大学）

発表要旨

本発表は、YouTuber がしばしば発する「チャンネル登録お願いします」という発話を取り上げ、その発話を成立させているメディアとの関係も考慮に入れて検討していく。

言語人類学者のマイケル・シルヴァスティンは、発話行為をコンテクストに結びつける作用を指標性という概念から捉えるとともに、そのような指標性そのものに働きかける語用をメタ語用と呼んだ。「チャンネル登録お願いします」という発話は、コミュニケーションを成立させる関係性そのものに働きかける発話行為であり、その点で一種のメタ語用であると位置づけられる。

レヴィンソンは指標性を、インテンションと同時にアテンションに関わるものとして位置付けている。その整理を踏まえれば、アテンションをめぐるメタ語用が成立することになる。授業中に教師が生徒に対して、「ちゃんと授業に集中してくださいね」と指示するような発話だ。これを受け手の未来のアテンションへの指示として「ここから大事な内容になるので集中して聞いてくださいね」という形に変形すると、「チャンネル登録お願いします」という発話にかなり近くなる。しかし、チャンネル登録という行為は、メディアの介在という、直接的なアテンションの喚起とは明らかに違う側面が含まれている。

そこでヤコブソンが六機能図式のなかで提起している接触概念に着目する。ヤコブソンは接触を、アテンションに関わる「心理的なつながり」とメディアに関わる「物理的回路」の二つの側面からなるものとして位置付けている。ヤコブソンは電話をモデルとしたリアルタイムのコミュニケーションを想定しているが、モデルを YouTube に置き換えると、チャンネル登録という行為がアテンションとメディアが交差する地点に位置することが見えてくる。「チャンネル登録お願いします」の発話の分析を通じて、発話行為とメディア実践がますます融合しつつある現代におけるコミュニケーションを考察する。

アフォーダンス論から考えるコミュニケーションとモノ
―ぬいぐるみを事例として―

宮脇　かおり（桃山学院大学　発表者は、人とモノとのコミュニケーションを考える余地はあるのかという問いを、ぬいぐるみと人との関係性を題材として取り組んできた。これまでには、ぬいぐるみ愛好家の語りを分析し、ぬいぐるみと人の間にコミュニケーションらしき現象が起こっていると主張した（宮脇 2023)。しかし前述の研究では、ぬいぐるみと持ち主とのコミュニケーションは所詮愛好家らの単なる妄想であると切り捨てられてしまう可能性が常にあった。

そういった反論が前提としているのは、人間と非人間を全く異質の存在として位置づけ、人間だけを主体として特権化し、非人間は人間に操作される従順な客体であると考える人間中心主義(床呂 2018)であろう。本発表では、人がモノに意味付けを行うという人間中心主義的アプローチではなく、ギブソンによるアフォーダンス論に依拠しつつ、モノが人にコミュニケーションをさせてしまうという新たなアプローチを提唱する。アフォーダンスとは、「媒質や面や対象などに備わる、環境の物理的属性が動物に特定の行為可能性を提供するということを意味する概念」（田中 2023, p. 31)とされる。例えば、ペンの形状や機能が人間に字を書くという行為を促していることが挙げられる。これをぬいぐるみに置き換えると、ぬいぐるみのふわふわとした形状やこちらを見つめているかのような瞳が、人間にぬいぐるみを抱きしめたり話しかけたりさせてしまうのである。

本研究では、モノが人にコミュニケーションを促す事例として、ぬいぐるみに強い愛着を持つ人々の語りと実際のぬいぐるみの写真を集めた「ぬいぐるみ健康法人もふもふ会ぬいぐるみ病院」サイト内「ぬいぐるみ病院アルバム」を分析対象とし、愛されているぬいぐるみが共通に持つアフォーダンスを抽出する。この分析から、モノと人とのコミュニケーションは人間側の主観的な意味付けというだけでは説明ができないという点を指摘したい。

引用文献

田中彰吾(2023)「第 1 章心の科学史から見たアフォーダンス」河野哲也・田中彰吾編著『知の生態学の冒険 JJ ギブソンの継承：アフォーダンスそのルーツと最前線』9-39. 東京大学出版会

床呂郁哉(2018)「『モノ』研究の新たな視座」桑山敬己・綾部真雄編著『詳論文化人類学:基本と最新のトピックを深く学ぶ』265-278. ミネルヴァ書房

宮脇かおり(2023)「ぬいぐるみという記号からコミュニケーションを捉え直す」『記号学研究 1』20-36.

領土・主権展示館とその名称と役割について
～「日本固有の領土」としての北方領土とそのイマジナリー～

藤巻光浩（フェリス女学院大学）

領土問題は、常に人々の心をかき乱す。ひとたび注目を集めるような政治的ステージに登れば、メディア・イベントと化すほどだ。領土は、常に国家の主権の問題として扱われる。その限りにおいて、常に国家主権が侵犯される問題として認識されるためである。実際、主権概念は、土地の領有とセットになったものとして、ウエストファリア体制確立の後、国際法上、定着してきた。そのため、国家の安全保障と一体化したものとして、国民国家の身体そのものとして認識されてきた。Tuathail（1996）によれば、これを「ジオボディ（geo-body）」と呼ぶ。

領土問題がメディア・イベントと化した後、2019 年に内閣府によって「領土・主権展示館（National Museum of Territory and Sovereignty）」が登場した。主に３つの領土問題（竹島、尖閣諸島、北方領土）に関する日本政府の主張が説明・展示されている。ここでは、主権と一体化した「領土」が、「見る」行為を媒介し、対象を認識することができるようになったのである。

本論では、とりわけ北方領土の展示に焦点を絞り、なぜ、またどのような条件下において、この館に「展示館」という名称が与えられ、観念的な主権概念が、視覚的に展示として結実しているのかを考察する。つまりなぜ、この館の名称と役割が「主権＝領土」の一体性と視覚化を確約し得る思想と相互補完的関係性を持つのか―その性質を思想としてのミュージアムを文脈として引きつけ、批判的に考察する。

Tuathail, Gearóid Ó. (1996) Critical Geopolitics: The Politics of Writing Global Space
University of Minnesota Press 1996

コミュニケーションとしての対話を再定義する
―「四象限の対話モデル」の意義と検討―

河村　まい香（明治大学）

本研究では、ここ数年で飛躍的に注目度の高まっている「対話」というコミュニケーション形態について、そもそもどのように定義できるのか、あるいは定義すべきであるのかについて、あらためて整理し直すことを試みてみたい。分野横断的で包括的な共通基盤を追究し、提示することが、今後の対話への理解と実践につながると信じるためである。

具体的には、対話の概念の曖昧性や、定義のばらつきに対処し、対話の複雑性や多様性について包括してイメージを掴むための独自のアイデアとして、筆者が提唱するのが「四象限の対話モデル」である。本モデルの縦横の軸はそれぞれ、対話参加者の自己開示の「オープン/クローズド」の緊張関係と、視点の豊かさの「一元的/多元的」の緊張関係を表している。加えて、本モデルの各 1～4 象限を通じて、対話の 4 つの主要なパラダイムケースを考察することも可能である。順に、情報探索的対話（information-seeking dialogue）、弁証法的対話（dialectics-oriented dialogue）、開示的対話（disclosure-oriented dialogue）、文化創造的対話（culture-making dialogue）と独自に名づけ、これらを分類した。四象限の対話モデルは、対話実践に対して 4 つの模範的なケースを提示し、文脈に応じた対話の機能的分析への利用にもつなげることができる。

最後に、本研究の限界かつ今後の展望として 3 点を挙げたい。1 つ目に、対話の曖昧性や文脈依存性を説明する「広い定義」だけでなく、人々の対話の経験を深めるためには指針や倫理について示した「狭い対話の定義」も提示する必要がある。２つ目に、対話が近年になって再注目を浴びている理由や、実際に行うのは難しい阻害要因について、その文化的および社会的背景の考察を加える必要がある。最後に、対話の有意義な実践を拡充するために、「対話のファシリテーターを増やしてゆくべき」という仮説の検討も今後深めてゆきたい。

ボームとヴィゴツキーの接点を探る
―対話統合モデルの構築を目指して―

小坂　貴志（東京国際大学）

ボームは、量子物理学者という立場にありながら、独自の対話理論と対話実践を構築・展開し、独自の対話論を広く普及させた。ヴィゴツキーは、発達心理学の領域において、児童発達への言語の果たす役割に関心を持ち研究を行なった。対話論において、ボーム、ヴィゴツキー両者は頻繁に参照されており、特に「思考」に対する深い洞察が共通して見受けられる。本研究の目的は、対話論として取り上げられる対話論者の考え方を交差させ、統合対話モデルを構築することに最終的な目的を置いた、予備的な文献比較に基づいた両者の主に思考に対する考え方を考察することにある。

具体的な研究手法として、ボーム著『ダイアローグ』とヴィゴツキー著『思考と言語』とを比較精読し、たとえば「思考」といった両者に共通する概念を抽出し、それぞれどのような意味で共通概念を論じているか、対話論における思考の位置付けは何かの 2 点について読み解いていく。精読の結果、両者が考える思考の特徴的相違が明らかになった。ボームは思考を個人・集団の両面で捉えており、相容れない集団的思考を生み出し、社会的パラドックスの元凶となっている状況を嘆き、これを是正する目的で、地球上の多様的思考を 20～40 人のグループで実現させ、相容れない前提を保留する方法で相互に対話させることで社会的パラドックスを生じさせない対話実践を考案した。ヴィゴツキーは、児童の知能発達の各段階において特有の思考形態を、その言語使用によって、外言・自己中心言語・内言という 3 つに特徴付けた。児童を取り巻く大人からの児童に対する外言を利用した呼びかけによって可能となる知能発達に対話が介在することを検証した。以上を踏まえて、両者にとっての最大の関心は、思考が他者との相互作用によって築き上げられ、具体的には、ボームは集団対話、ヴィゴツキーは指導としての教育対話が思考（再）形成に介在し得る点であることが明らかになった。

以降、本研究で取り上げた思考以外、またボーム、ヴィゴツキー以外の対話論者にも目を向け、古典資料の比較精読を行ない、最終的には対話の統合モデル構築を目指していきたい。

引用文献

Vygotsky, L. S. (1956). *Мышление и речь М.-Л.: Соцэкгиз, 1934. Подписана к печати в*

декабре 1934 года.（ヴィゴツキー, L. S. （柴田義松（訳）（2001）*思考と言語* 新読書社）

Bohm, D. (1996). *On Dialogue* Edited by Lee Nichol: Routledge.（ボーム, D. （金井真弓（訳） （2007）. *ダイアローグ* 英治出版）

陰謀論研究の歴史
―陰謀論の学際性と向き合う―

小川 凜（明治大学）

陰謀論は、長い歴史的伝統を持つ社会現象である一方で、陰謀論の研究が始まったのは 20 世紀に入ってからである(Michael & Knight, 2018)。本稿では、陰謀論研究の歴史を、陰謀論研究の芽生え、陰謀論研究の確立、陰謀論研究の学際化の３つに分けて概観する。まず初期の研究(1950 年代から 1960 年代)では、歴史的な事例の分析を中心として陰謀論は間接的なテーマとして論じられてきた。この段階では、ホフスタッターが陰謀論への信仰をパラノイア(偏執症)の一形態として病理化した「パラノイド・スタイル」というアプローチが構築された。次に、陰謀論研究は 1990 年代のカルチュラル・スタディーズの研究者たちの活躍によって継続的な研究テーマとして確立されていく。ここでは、共同体が自分たちの世界を理解するために用いる集団的なナラティブに研究の焦点が置かれ、陰謀論の魅力を理解し、文化的意義を評価するアプローチが構築された。そして最後に、21 世紀に入ってからの研究では、哲学と社会科学(心理学や政治学)といった学問領域の参入があり、陰謀論の研究課題に対して研究者がどのように位置づけるかは、大きく異なるようになった。心理学者などが陰謀論という概念を普遍的に捉えるのに対して、文化史家などは文脈的に捉えている。また、陰謀論に対する立場においても、研究者が明言していないものも多いが、肯定的、中立的、否定的なものに分かれて議論が進んでいる。このように、現在、陰謀論研究は、学問領域間の交流の不足によって断片化されている。本稿は、陰謀論へのアプローチを整理することによって、陰謀論の学際的かつ包括的な議論の発展に貢献したい。

引用文献

Butter, M., & Knight, P. (2018). The history of conspiracy theory research: A review and

commentary. In J. E. Uscinski (Ed.), *Conspiracy theories and the people who believe them* (pp. 33–52). New York, NY: Oxford University Press.

日本コミュニケーション学会
第 53 回年次大会
プロシーディングス
2024 年

Japan Communication Association
53nd Annual Convention Proceedings

目次

Contents

〈シンポジウム〉東北支部企画シンポジウム　地域とウェルビーイング

地域とウェルビーイング—まちづくりと地域コミュニティの観点から— 37

司会・シンポジスト　宮曽根　美香（東北工業大学）

シンポジスト　金井 辰郎（東北工業大学）

シンポジスト　二瀬 由理（東北工業大学）

〈パネル〉大学・学部案内の批判的ディスコース分析

大学・学部案内の批判的ディスコース分析 40

司会：宮原哲（西南学院大学）

発表者：川野優希（立教大学大学院）

郭仁敬（西南学院大学大学院）

伊藤萌紅（メリーランド大学大学院）

発表者：平野遼（立教大学大学院）

コメンテーター：師岡淳也（立教大学）

コメンテーター：清宮徹（西南学院大学）

〈パネル〉東北支部パネル　ウェルビーイングについて

ウェルビーイングについて　—東北支部の取り組み— 43

宮曽根　美香（東北工業大学）

関　久美子（新潟青陵大学短期大学部）

規会（青森県立保健大学）

五十嵐　紀子（新潟医療福祉大学）

小林　葉子（岩手大学）

ディスコースとコミュニケーション　Discourse and Communication

震災復興下の七人の女将たち —ディスコース分析によるアイデンティティの考察— 46

清宮　徹（西南学院大学）

日本と中国における結婚の歴史的変遷と日中間国際結婚研究への展望 49
張　馨文（関西大学）
守﨑　誠一（関西大学）

「相互の意味付け」を通して見る日本の若者の友人関係におけるコンフリクト行動 52
郭　仁敬（西南学院大学大学院）

コミュニケーション実践　　Communication Practice

From English Communication to English/Communication
—A Case Study in Embedded Communication Interventions— 55
Eli Walgrave (Miyagi Gakuin Women's University)
Fumie Shibuya (Tohoku Bunka Gakuen University)

競技ディベートの持続可能性に関する考察 58
上土井　宏太（鹿児島大学）

レトリック・公的言論　　Rhetoric and Public Discourse

レトリックとしての法的フィクション 61
青沼　智（国際基督教大学）

地球環境保護に対峙する日本の超越的レトリック
—国内清涼飲料メーカーの 2030 年目標のペットボトルリサイクル目標を対象に— 64
田島慎朗（関西大学）

ハマス・イスラエル衝突に関する日本の報道状況—ウェブを用いた言語学的分析— 67
東照二（米国ユタ大学世界言語文化学部）

オンラインコミュニケーション　Online Communication

オブジェクト指向コミュニケーションモデルと教育—いじめ・不登校の問題に対応して— 70
小島　正美（東北工業大学）
宮曽根　美香（東北工業大学）

オンラインにおける営業担当者の視覚的イメージと音声の組み合わせが顧客の関心に与える影響 .. 73
八代　華代子（慶應義塾大学大学院博士課程）
白坂　成功（慶應義塾大学大学院）

コミュニケーション学の領野　Expanding Communication Studies

「チャンネル登録お願いします」のメタ語用論の試み —指標性と接触の概念を手掛かりに— 77
谷島　貫太（二松学舎大学）

アフォーダンス理論から考えるコミュニケーションとモノ —ぬいぐるみを事例として— 80
宮脇　かおり（桃山学院大学）

領土・主権展示館とその名称役割について
—「日本固有の領土」としての北方領土とそのイマジナリー— 83
藤巻光浩（フェリス女学院大学）

コミュニケーション理論の更新　Upgrading Communication Theories

コミュニケーションとしての対話を再定義する —「四象限の対話モデル」の意義と検討— 86
河村　まい香（明治大学）

ボームとヴィゴツキーの接点を探る —対話統合モデルの構築を目指して— 89
小坂　貴志（東京国際大学）

陰謀論研究の歴史 —陰謀論の学際性と向き合う— 92
小川　凜（明治大学）

地域とウェルビーイング
―まちづくりと地域コミュニティの観点から―

司会・シンポジスト　宮曽根　美香（東北工業大学）
シンポジスト　金井 辰郎（東北工業大学）
シンポジスト　二瀬 由理（東北工業大学）

1.仙台市のまちづくりとウェルビーイング

伊藤ら(2003)が作成した主観的幸福感尺度のうち12項目を用いて、アンケートにより仙台市居住者の主観的幸福感を測定し、心理学・コミュニケーション学・経済学から考察した。さらに、その主観的幸福感尺度の得点とその他の項目（介護・医療・交通・コミュニティネットワークなど）の回答からわかるいくつかの指標との関連を検討した。回答者全員の主観的幸福感尺度の得点をまとめると、115名の回答者の主観的幸福感尺度得点の平均値は48点満点で男性32.38点、女性31.5点であった。伊藤ら（2003）において調査された社会人の主観的幸福感尺度の平均値は、男性35.24点、女性34.85点であることを考えると、仙台市在住の人々の主観的幸福感はあまり高くない。幸福度と他の項目との関連性を分析しやすくするために、主観的幸福感尺度得点に基づき幸福度高群（A群と略記)、幸福度低群（B群と略記)、幸福度中群（C群と略記）の3群に分け分析を進めた。

まず年齢と幸福度との関係について、10歳刻みでグループを分けA～C群の度数を示した。幸福度の異なる3群は年代で人数に偏りがないことが示された（$\chi 2(14)=9.842$, n.s.)。次に、“家族”という人的ネットワークの存在と幸福度との関連を検討するために、結婚の有無、子どもの有無と幸福度の分析を行った。未婚者と既婚者でA～C群の人数比を比較したところ、未婚者が既婚者に比べ、B群の割合が多いことが示された($\chi 2(2) = 6.308$, $p<.05$)。子どもの有無については、子どもがいる人の方がいない人に比べ、幸福感を感じている人の割合が高かった（$\chi 2(2) = 6.740$, $p<.05$)。これらの結果は家族という存在の有無が、主観的幸福感に影響を与えることを示している。収入と主観的幸福度との関係をみると、個人収入では収入の高い群と低い群でA～C群の割合には差が見られなかった（$\chi 2(12) = 16.747$, n.s.)。世帯収入では、収入の高い群（800万円以上）ではA群の割合が高く、収入の低い群（400万未満）はB群の割合が高いことが示された。以上から、仙台市民の多くが“家族”という存在を自分の幸せの一部とみなし、家族の豊かさを重視していることが分かった。

次に、コミュニティネットワークにおける社会的交流を視野におき、自分が新たに地域コミュニティに転入する場合の意識および地域コミュニティに他から越してくる人の受け入れ方について、主観的幸福度との関連を調査した。前述のA～C群に対し、幸福度と自分が新たに地域コミュニティに転入する場合の意識、幸福度と地域コミュニティに他から越してくる人の受け入れ方でクロス

集計表を作成し、χ2 検定を行った。その結果幸福度と自分が新たに地域コミュニティに転入する場合の意識には関連があった（χ2(6)＝23.255, p<.005)。A 群は他の群に比べ、ある程度地域のコミュニティに入っていけると楽観的に捉えていることが示された。さらに、幸福度と地域コミュニティに他から越してくる人に対する受け入れ方についても関連があった（χ2(8)＝16.109, p<.05)。A 群の人ほど他地域からの移住を歓迎していることが示された。以上を踏まえると、住民がコミュニティの中で他者とのコミュニケーションに積極的であり、他者の受容度が高いと幸福度が高い可能性があると言える。さらにインタビュー調査からは、他者とのかかわりの中で自身を価値ある存在として認識できることが幸福感につながる傾向が示された。この結果は、近しい間柄との関係の良好性が主観的幸福感に寄与するという先行研究の結果に抗うものではなかった。行政として住民の幸福度を上げるために人間関係の絆や帰属意識を持ち続ける働きかけが求められると言えよう。

最後に生活満足度について、地域の医療サービスと育児サービスへの満足度に焦点を当て、主観的幸福度との関連を検討した。前述の A～C 群に対し、主観的幸福度の程度と医療サービスの満足度、主観的幸福度の程度と育児サービスについての満足度でクロス集計表を作成し、χ2 検定を行った。その結果、幸福度と地域の医療サービスについての満足度は関連があった（χ2(4)=11.789, p<.05)。すなわち、A 群は現在の医療サービスに満足している人が多いことが示された。また、幸福度と地域の育児サービスについての満足度は関連がなかった（χ2(6)＝3.913, n.s.)。回答者の年齢が高く育児サービスの実態がわからないという回答が多く見られたことが一因として考えられる。

また、2 地域居住については、地方創生と人々の幸福度向上の契機となる可能性がある。コロナ禍下のオンライン化の進展により、企業によっては、地方に居住しながらテレワークで働くことを許容するようになった。また高齢化の進展とともに、老親の見守り・介護を目的として都市＝地方間を往復する人や、相続により地方住居を取得し、その維持・管理のために往来する人も増えている。都市生活は主生活の拠点として残しながらも、地方と交流機会を持ち続けるライフスタイルは、交流人口増による地方創生と、往復する個人の心的な豊かさを生み出すかもしれない。そのような傾向をうかがうことのできるいくつかの傾向をアンケート調査によって読み取ることができた。

2. ウェルビーイングという価値観の浸透と地域コミュニティの変容

社会全体のウェルビーイングを高めるためには、地域コミュニティが一人ひとりのウェルビーイングを実現する場でなければならない(坂倉, 2023)。地域コミュニティがウェルビーイングという価値観の浸透によりどのような変容を遂げる可能性があるか、地域活動他の参与観察を踏まえ考察する。ウェルビーイングが重視されると、個々人の地域コミュニティに対する意味の変容が起こる。

規模的な成長や外部評価よりも質的な充実や内面的な充足感を重視し、地域の課題解決のための活動よりも楽しさ、組織的よりも個人的ネットワークを通じた実践を重視するようになる。職場と家庭に加え地域コミュニティに関わることがアイデンティティーに変化をもたらし、充実感や記憶につながることで地域コミュニティとしての本来感を高める可能性もある。

引用文献

板倉杏介（2023)「ウェルビーイング社会における地域コミュニティ」『社会システム変容の研究と有識者のコラム集』NTT 社会情報研究所.

伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至（2003）「主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討」，『心理学研究』，74(3):267-81.

大学・学部案内の批判的ディスコース分析

司会：宮原哲（西南学院大学）
発表者：川野優希（立教大学大学院）
郭仁敬（西南学院大学大学院）
伊藤萌紅（メリーランド大学大学院）
発表者：平野遼（立教大学大学院）
コメンテーター：師岡淳也（立教大学）
コメンテーター：清宮徹（西南学院大学）

本パネルは、大学が発信するテクストを分析の対象とした 2 つの批判的ディスコース分析（Critical Discourse Analysis: CDA）を通して、少子高齢化、産業構造の変動、グローバル化の進展など大学を取り巻くさまざまな環境の変化に注目しながら、大学教育に内在化する課題を明らかにすることを目的とする。第一発表者の川野・郭・伊藤は、大学案内パンフレットの分析を通して、新自由主義的イデオロギーが大学の教育と運営・施策にもたらす影響について議論する。第二発表者の平野は、文部科学省・受験生・社会と大学とのそれぞれの関係性に着目し、大学のアドミッション・ポリシーにおける「コミュニケーション能力」の語られ方について考察する。

なお、本パネルは、発表原稿に事前に目を通した 2 名のコメンテーターが、各発表について講評を行ない、その後に全体での質疑応答および議論に移る。議論では、司会から提示される本パネルの内容に関連するいくつかの議題について、発表者、コメンテーター、フロアが複数のグループに分かれて話し合いをした後、全体での意見の共有を行なう。

大学案内パンフレットの批判的ディスコース分析

立教大学大学院　川野 優希
西南学院大学大学院　　郭 仁敬
メリーランド大学大学院　伊藤 萌紅

本研究は、新自由主義的イデオロギーが大学の教育と運営・施策にもたらす影響と、高等教育機関としての使命を持つ大学が果たすべき役割について、コミュニケーション学の視点から議論

することを目的とする。

先行研究によると、1990 年代後半から日本の大学においても市場競争原理の導入が本格化し、「大学の企業化、会社化」が進められていったが、その背景には新自由主義イデオロギーの蔓延がある（細井、2018)。大学が、学問・教育の倫理（「知の共同体」）から経営優先の論理（「知の経営体」）（細井、2014）へと構造転換する過程で、学生は大学にとっての「顧客」や「消費者」と意味づけられた。各大学は、少子高齢化やグローバル化の影響による大学間の競争の中で、グローバル社会で活躍できる人材の育成を謳い、卒業後のキャリアを宣伝するようになった。

一方で、こうした教育に介入する市場の原理に対する批判は、政府や文科省などの行政のディスコースを対象とすることが多く、大学教育の主体である大学が発信するメッセージを取り上げて分析したものはあまり多くない。たしかに、行政による政策は大学の教育や運営・施策などに影響を与えるが（細井、2018)、一方で、新自由主義教育改革に対する批判や対抗策も提示されており（佐貫・世取山、2008)、大学がそうした市場の原理を一概に受け入れているとは言い難い。

そこで本研究は、大学が自らの役割をどのように位置づけているかを明らかにすることを目的に、対外的なアピールとしてのメッセージが凝縮されていると考えられる大学案内パンフレットにおけるテクストを分析する。研究方法には、批判的ディスコース分析（Critical Discourse Analysis: CDA）を活用する。CDA は、「言語の中に現れた支配、差別、権力、そして管理という、目に見えるだけでなく、不透明な構造上の関係性を分析」（ヴォダック、2010、p. 11）するもので、権力やイデオロギーが研究の焦点として挙げられる。本研究ではとくに、新自由主義大学改革を推し進める行政、業務効率化や経営合理化を優先し、利益を生み出す人材の確保を目的とする企業、そして入学前から就職を意識する受験生の 3 つのコンテクストとの関係性を踏まえ、大学が教育機関としてどのような使命を持ち、テクストとして発信しているかに注目する。その上で、「新自由主義的ディスコース（Neo-liberal discourse)」がどのように大学案内パンフレットに現れているのかを明らかにする。

引用文献

ヴォダック．(2010)．「批判的談話分析とは何か：CDA の歴史、重要概念、展望」ルート・ヴォダック＝ミヒャエル・マイヤー編（野呂香代子訳）『批判的談話分析入門：クリティカル・ディスコース・アナリシスの方法』三元社，pp. 9-25.

佐貫浩・世取山洋介．(2008)．『新自由主義教育改革―その理論・実態と対抗軸』．大月書店．

細井克彦．(2014)．『新自由主義大学改革―国際機関と各国動向』東信堂．

細井克彦.（2018）.『岐路に立つ日本の大学：新自由主義大学改革とその超克の方向』 合同出版.

コミュニケーション系学部・学科アドミッション・ポリシーの批判的ディスコース分析

立教大学大学院　平野遼

就職活動や英語教育など、さまざまな文脈において「コミュニケーション」や「コミュニケーション能力」の重要性が語られている。高等教育においてもコミュニケーションに関する学びに注目が集まっており、「コミュニケーション」を名に冠した学部・学科が近年増加している。本研究は、名称に「コミュニケーション」を含む学部・学科のアドミッション・ポリシーに着目するものである。

大学では、アドミッション・ポリシーを策定し、アドミッション・ポリシーに基づいた入学者選抜を実施している。そのため、各大学が策定するアドミッション・ポリシーは、高校生のその学部・学科に関する認識形成に影響をあたえるディスコースとなりうる。以上のことから、アドミッション・ポリシーの分析は重要な研究課題といえる。そこで本研究は、コミュニケーション系学部・学科のアドミッション・ポリシーで構築される「コミュニケーション能力」に関する考え方の枠組みがどのようなものかを明らかにすることを目指す。

研究方法には、批判的ディスコース分析の手法を用いる。コミュニケーション系学部・学科のアドミッション・ポリシーで用いられている「コミュニケーション能力」（ないしは「コミュニケーション力」）に注目し、これらのキーワードの使われ方について分析する。各学部・学科のアドミッション・ポリシーの記述を、アドミッション・ポリシー策定に当たっての文部科学省との関係、アドミッション・ポリシーを受け取る側である受験生との関係、「コミュニケーション能力」を重視する社会との関係という 3 つのコンテクストに着目し分析する。そのうえで、アドミッション・ポリシーで構築されている「コミュニケーション能力」に関する考え方の枠組みはどのようなもので、どのように構築されているのかを明らかにし、その考え方の枠組みの影響について考察する。

ウェルビーイングについて
―東北支部の取り組み―

宮曽根　美香（東北工業大学）
関　久美子（新潟青陵大学短期大学部）
規会（青森県立保健大学）
五十嵐　紀子（新潟医療福祉大学）
小林　葉子（岩手大学）

東北支部では、東日本大震災をはじめとする数々の災害を経験してきた。人々が災害を乗り越え、幸福や健康を目指す中でウェルビーイング（Well-being 以降 WB）という概念の重要性を改めて認識する必要がある。そこで、WB を構成する要素は複合的に作用し合い、より大きな WB を生み出している、という認識のもと、4 つの研究調査報告を行い、WB の現状と課題についてパネルディスカッションを行う。本支部では、何度かこのテーマについて議論してきた。JCA 年次大会での本パネルではフロアーとの質疑応答も交え、さらに議論を深めたいと思っている。そのため、本原稿の末尾にはあえて「結論」を設けないこととする。

1. 「WB とは，ヨガと WB」（宮曽根）

WB は、「幸福」「健康」という意味であり、世界保健機関（WHO）憲章によれば、健康は単に病気でないことや体力があることだけでなく、肉体的・精神的・社会的な満足感がある状態を指す。アメリカのギャラップ社によると、WB は Career well-being（仕事やキャリア構築の幸福）、Social well-being（人間関係の質）、Financial well-being（経済的な幸福）、Physical well-being（身体的な幸福）、Community well-being（地域社会での幸福）の 5 つの構成要素から成り立つとされている。

さらに、WB はポジティブ心理学とも関連があり、Seligman の PERMA モデルでは、WB をポジティブ感情、没頭、人間関係、生きる意味、達成の 5 領域から捉えている。

ヨガと WB の関係について、主催するヨガクラスの実例を通して考察した。コロナ禍においても継続的に通う参加者や新たに参加する人々が存在し、アンケート調査の結果、ヨガを始めた後の幸福度が有意に上昇していることが示された。ヨガが満たす WB の要素は、PERMA の 5 領域のうち、特にポジティブ感情や生きる意味に焦点を当てている可能性が浮かび上がった。これにより、ヨガが WB 向上に寄与しており、特にポジティブ感情や生きる意味に関連していることが示唆された。ヨガは健康だけでなく、幅広い面で個人の幸福感に影響を与えている可能性があり、その効

果は量的調査と参与観察を通して明らかにされた。

2. 「ヒューマンライブラリーと WB」（関）

ヒューマンライブラリーとは「人を貸し出す図書館」である。この「図書館」には社会の中でマイノリティ的背景を持つ人々が「本」として集まり自身を語る。参加者である聴き手は「読者」としてこれらの「本」と対話する。この対話を繰り返すことで互いを理解し、ひいては社会の差別や偏見を低減することを目的とし、日本でも各地で開催されている。筆者も 2018 年より学生とこのヒューマンライブラリーを開催している。

ヒューマンライブラリーは「読者」の偏見低減に資するだけではなく、「本」の自己受容の場、企画・運営に携わった学生にとっても大きな学びの場となる。開催後のアンケートからもそれぞれの立場で得た深い気づきの共有があり、この取り組みの意義を再認識するとともに、筆者にとってもヒューマンライブラリーを継続する大きなモチベーションになっている。その中でも筆者の心を強く動かすのは「本」の存在である。「本」は対話において初対面の「読者」に対し、自身のマイノリティとしての経験という深い自己開示が求められるが、それは容易なことではない。時にはフラッシュバックを起こし対話継続が困難になる「本」もいる。それにもかかわらず、筆者の開催するヒューマンライブラリーには「本」としての参加希望が後を絶たない。「自分の経験が役に立てば」「自分の障害について知ってほしい」「対話に向けて自分を見つめなおしたい」と参加理由も多様であるが、何が彼らをそこまで突き動かすのか。支部パネルのテーマである「ウェルビーイング」の概念をもとに、彼らが「本」としてヒューマンライブラリーに参加することが、彼らの中の WB とどう関係しているか紐解いていきたい。

3. 「医療現場の言語サポートと WB」（川内）

医療における多言語サポート体制の弱さは、いまだ指摘されているところであり、医療従事者と外国人患者の間で言語的トラブルからくるヘルスコミュニケーションの問題が起こりやすい。外国人から見た医療者のヘルスコミュニケーションの研究では、患者のアクセス権や情報保障の視点がなければ、正しい医療がおこなえないことが示唆されている。文化的背景や医療システムなど様々な環境が相互に関係している。

医療現場で身体的幸福を得るためには、適切な治療を受けることと同時に精神的幸福を得るためには、「理解できる」こと「納得すること」は欠かせない。医療現場におけるやり取りにおいて、外国人患者の場合はさらにハードルが上がる。現状では「医療通訳」が医療機関の言語サポートとして十分に活用できているとは言い難く、少ない医療通訳者に頼っている現状がある。そこには、日

本の医療システムの問題、地域性の問題、受け入れ機関の問題、医療通訳養成の問題など、受け入れ体制や通訳養成・派遣、そして何よりも医療通訳のキャリア WB の課題も大きい。一方「通訳アプリ」「電子機器」等のツール利用も増えてきているものの、誤訳の問題や保証の問題などがあり、機器の使用においても、今後考え続けていかなければならない。医療現場の言語サポートは、外国人患者への情報保障であり、患者の WB が保たれるよう時代に合わせた対応が必要になると考える。

4.「医療福祉と WB」（五十嵐）

超高齢社会において、単に長く生命を維持することではなく、要介護状態になることを予防し健康的な生活を継続できる健康寿命の維持が重要とされている。しかし、その健康寿命を維持した生活というのは、個人の努力のみで獲得できるものではなく、他者との関係性の中で作られていくものである。ペットは家族であると言われて久しいが、ペットを飼育している人の方が健康寿命が長いという報告もあるように、飼い主にとっての WB を構成する大きな要素になっている。一方で、ペットの飼育崩壊に陥り、地域社会で孤立する人々が急増いることは、現代の社会課題でもある。特に、去勢避妊手術をしない猫の頭数が管理不可能なまでに増えてしまい生活が破綻する猫の多頭飼育崩壊が地域を問わず問題となっている。ペットの飼育崩壊に陥る人たちのほとんどが、地域社会で孤立しており、高齢であることだけでなく、病気や障害を抱えている場合も少なくない。最も大きな要因となっているのが貧困であり、その背景は複雑、かつ、複合的であり、そういった人々への支援は非常に困難である。医療や福祉の面で他者の支援が必要な状況であるという認識が本人に乏しく支援を拒む場合も少なくない。不適切なペット飼育支援を入り口ではあるが、ペット飼育支援が他者との関係性を作り、必要な支援に結び付けるきっかけにもなる。行政、地域のボランティア団体、医療福祉関係者が連携し、人と人とのつながりを創出することから失われた WB を再び見出そうとする取り組みについて報告する。

震災復興下の七人の女将たち
―ディスコース分析によるアイデンティティの考察―

清宮　徹（西南学院大学）

本研究発表の目的は、東日本大震災の復興過程における女性のコミュニティ・リーダーが危機やその後の復興に対してどのような役割を果たしたか、そのコミュニケーションの過程を考察することにある。安定した社会・経済活動とは異なる危機と復興の状況下、(主に宿泊業の)女将の社会的な活動とコミュニティ内外の関係性の発展から得られる知見を考察する。女将の役割は、通常の民間企業の階層的な組織構造とは異なり、組織コミュニケーションの視点から非常に興味深い。本研究は、危機と復興における女将のコミュニケーションが、どのように地域コミュニティや外部との関係を発展させ復興に寄与しているかについて探求する。とくに女将が震災前と後でどのように変わったかに焦点を当てる。

東日本大震災の復興については多くの研究がなされているが、震災復興をディスコース分析した研究はない。本発表は 2013 年から被災地をフィールドワークし、またインタビュー調査した大規模研究の一部である(清宮，2022)。なかでも復興におけるコミュニティ・リーダーに焦点を合わせた研究から派生した(Lin, et.al., 2017)。これらの研究で得た重要な知見は、ディスコースとアイデンティティの関係であり、それらの変化が復興の発展に関係している点である。ボランティア活動で被災地を訪れる人々との交流、さらにコミュニティからの感謝と恩返しのディスコースが復興のカギとなっていた。これらはジェンダー中立的に考察されていたが、インタビューの多くは男性であり、女性の視点が欠けていることから、女性のコミュニティ・リーダーとして被災地の復興に積極的な貢献をしている女将との対話を試みた。あらゆる組織は決してジェンダー中立的であることはなく、必ずそこにはコミュニケーションを通じたジェンダーの調整が行われていると考える。本研究は女将のコミュニケーションとアイデンティティ・ワークについてディスコース分析を行う。

本研究の方法論は、質的研究のひとつのアプローチであるディスコース分析の視座に立つ。この研究方法は一般的に、インタビューを含めたフィールドワークや事例研究が多いのが特徴であり、本研究は筆者が 2013 年から 2018 年まで 5 年間(57 日間)行ってきた被災地(主に宮城県北部)のフィールドワークをもとにしている。この調査では、震災直後から被災者や避難所を主導的にケアし、その後の復興を積極的に推進した方々(コミュニティ・リーダー)にインタビューを行った。さらに 2023 年に 18 日間の追加リサーチを行い、6 件の宿泊業及び 1 件のマリンスポーツシ

ョップの女将とのインタビューを行った。7 つの組織のインタビューには、女将の配偶者や従業員とも話す機会を得た。なおこのインタビューは、「みやぎおかみ会」の紹介をもとに行った。デジタル録音された音声データはトランスクリプトとして文字化され、これらをもとにディスコース分析が行われた。今回のアプローチは、おもにインタビューという対話のテクストをもとにしたナラティヴ分析である。

ディスコース分析から浮かび上がったのは、女将のアイデンティティの変化である。震災前と後では、女将の態度や仕事の取組みが変わったことが示唆される。とくに 2 つの視点からナラティヴについて詳細な分析を行った。ひとつは、ジェンダーに関わるディスコースについて分析を行い、女将という役割と連動する特徴が理解できた。例えば、女将の「母性的」ディスコースである。これは女将の仕事と密接につながっており、女将のアイデンティティ・ワークとして、彼女たちの行動に表出される。もう一つは「女将業」のディスコースである。震災前は、控えめな立場を維持しながら、常にお客様へのサービスから従業員への配慮に専念してきた。震災は女将の行動を大きく変えた。7 人の女将はそれぞれ異なる方法であるが、より積極的に声を発信するようになり、地域の集まりや復興へのプロジェクトに積極的に関与するようになった。

本研究はナラティヴのテクスト分析に加えて、次の 3 つのマクロ的コンテクストを考慮して考察が行われる。1)人間関係の密度が濃い地域性、2)日本の社会・文化的特性、3)資本主義経済システムである。議論の焦点は、女将のナラティヴが示唆する「ジェンダー調和的ディスコース」である。周囲の人々とうまく折り合いを付けながら、コミュニティ内外と協力関係を推進する女将のアイデンティティ・ワークは、きわめて特徴的である。一見するとジェンダーとは無関係のように見えるが、女将のナラティヴは男性と対立関係を推し進めるものではなく、むしろ協力的なコミュニケーションであった。男女間の協力的な分析結果はアフリカなど欧米以外の地域に見られ、Biwa (2020)は従来のフェミニズムの概念は欧米的であり、アフリカの文脈には適していないと提起する。これはアフリカや日本のジェンダー関係は良好であるという短絡的な結論を示すものではない。日本のジェンダーと組織の研究では、‘協力’に潜む搾取に着目しなくてはならない。ここでの議論は、欧米の研究が中心化している男性と対抗したり対等化しようとする「ジェンダー対抗的ディスコース」(例えば、Murphy (1998)の航空機のパイロットとキャビンアテンダントの対立関係)とは対照的な点にある。さらに女将業のディスコースでは、自分たちの旅館やホテルの利益回復を最優先するのではなく、地域社会全体を再建させることを通じて自分たちのビジネスを活性化させるという復興の形を示している。女将としてのプロフェッショナルなアイデンティティとジェンダー・アイデンティティという複合的なアイデンティティが交差し、女性のコミュニティ・リーダーとして活躍を続けている。結果的に、女性のエンパワーメントに繋がって

いることについて議論を展開する。（本研究は「日本経済研究センター研究奨励金」を受けた。）

引用文献

Biwa, V. (2020). African feminisms and co-constructing a collaborative future with men: Namibian women in mining's discourses. *Management Communication Quarterly*, *35*(1), 43-68.

清宮徹(2023)「震災復興のディスコース分析 : アイデンティティの言説的構成とレジリエンス」『組織科学』第 65 巻第 3 号 pp. 63−78

Lin, Y., Kelemen, M. and Kiyomiya, T. (2017). The Role of Community Leadership in Disaster Recovery Projects: Tsunami Lessons from Japan. *International Journal of Project Management*. 35(2), p.913-924.

Murphy, A. G. (1998). Hidden transcripts of flight attendant resistance. *Management Communication Quarterly, 11*(4), 499-535.

日本と中国における結婚の歴史的変遷と日中間国際結婚研究への展望

張　馨文（関西大学）
守﨑　誠一（関西大学）

1. 研究背景

日本と中国は地理的に近接し、同じ儒教文化圏に属しているが、両国の結婚を取り巻く状況には、類似点だけではなく相違点もある。本研究では、日本と中国の結婚事情について歴史的に概観し、近年の結婚難の要因について検討した上で、日中間の国際結婚の今後の可能性と研究すべき課題について論じる。

2. 日本と中国の結婚

日本では、明治時代から第二次世界大戦末まで、結婚は主に家業共同体であるイエの継続を目的とした見合い結婚が主流であった。第二次世界大戦が終わると、イエ制度が廃止され、企業社会が勃興し、多くの人々が仕事と配偶者の選択に対する親の統制から解放され、恋愛結婚が普及するようになった。当時は、好調な経済環境や人々の間での積極的な結婚相手の紹介によって、大多数の若者が結婚できるという「皆婚」の状態が生まれた。しかし、その後の雇用の不安定化と欧米からの性革命が、結婚による「豊かな生活」と「親密性」の追求を困難にさせていくことで、結婚することが難しい状況が生まれた（山田, 2008, 2017, 2019）。

中国における結婚も、かつては親や親族の意思に基づく見合い結婚が主流であった（虞, 2008; 張, 2016）。しかし、1949 年に中華人民共和国が成立した後、1950 年になって婚姻法が制定され、結婚が本人の自由意志に基づいておこなわれるようになった。その後、1980 年から実施された改革開放政策により、経済が大きく成長することで、女性が配偶者を選択する際に、男性の家族および男性自身の金銭的条件や財産獲得能力が重視されるようになっていった（王・徐, 2011）。特に、結婚において男性が住宅を提供できるかが注目されるようになり、大都市における住宅価格の高騰が、結婚適年齢を過ぎても結婚できない「剰男」「剰女」を生むことになった。

山田（2008, 2017, 2019）によると、欧米からの影響を受けた離婚の自由化とフェミニズムの浸透により、カップル関係がより個人的かつ自由になった結果、結婚をしなくても性的関係を楽しむことが可能になり、結婚は必ずしも親密な関係の永続を保証しなくなった。加えて、経済不況によって引き起こされた雇用の不安定化の影響で、結婚によって「豊かな生活」と「親密性」の両方を同時に追求することが困難になることで、日本の晩婚化と非婚化（生涯未婚率は、2020 年において男性が 28.3%、女性が 17.8%）の状況が生まれた。

これに対して中国の場合は、他の国々において 100 年近くかけて達成した経済・社会・文化の発

展を、改革開放後のわずか数十年で達成したため（斎藤, 2023）、中国人の恋愛・結婚を取り巻く状況が複雑化するとともに、住宅問題や結婚に対する親の過度な関与などによって晩婚化が進行した。しかし、生涯未婚率は依然低い水準のまま（2020 年において男性が 3.11%、女性が 0.44%）であり、伝統的な「早婚普婚」から「晩婚普婚」への転換が進んだに過ぎないと捉えることもできる（陳・李, 2020）。ただし、14 億以上の人口を考慮すると、非婚者の“数”は相当な規模に達することになる。

3. 日中間の国際結婚と今後の研究課題

日中間の国際結婚は、1980 年末から 1990 年代の日本のバブル崩壊期と中国の改革開放の時期に、経済的理由で結婚できない日本人男性、特に農山村に住む日本人男性が、経済的な上昇婚を求める中国人女性と仲介型の国際結婚をしたことに始まる。2000 年代になると、中国の高学歴化と競争激化によって、生きづらさを感じた若者が留学の道を選び、同じ頃に日本が留学生 30 万人計画を打ち出しこともあって、日本に留学する中国人が急増した。その中には、卒業・修了後に日本で就職し、日本人男性と出会い、結婚して日本での永住を望む中国人女性も現れた（賽漢卓娜, 2017）。しかし、最近になって中国経済が著しく発展したことにより、比較的裕福な高学歴中国人女性が増加したことから、日本人男性との国際結婚の選択理由は、これまでとは変化していることが考えられるが、そのような女性たちを対象とする研究はまだ十分に行われてない。そのため、日中の経済的格差が縮小している中、日本人男性と結婚した中国人女性が、農村に嫁いだ女性と同様にいまだ上昇婚を目的として結婚しているのか、それとも別のどのような目的で結婚しているのかについては明らかになっていない。また彼女たちは、留学を経て日本で就職をしていることから、言語の問題はほとんどないが、日本人の夫との結婚生活の中でどのような問題（国際結婚であることが原因の問題と夫婦一般にみられる問題の両方）に直面しているのか、夫との間で家事・育児と仕事の分担・両立はどのように図られているのか、子どもに対する中国文化・言語の継承はどの程度積極的におこなわれているのか、といったことは、今後とも増加が予想される日中間の国際結婚について理解していく上で重要な研究課題であると思われる。加えて、近年少しずつ増えている日本人女性と中国人男性の国際結婚についても、研究の必要性がある。

引用文献

虞萍（2008）「現代中国の都市部における女性の婚姻意識と新ライフスタイルー『中国婦女報』を手がかりに」『現代中国研究』22, pp.80-94.

王英侠・徐晓军（2011）「择偶标准变迁与阶层的封闭性」『青年探索』2011 年第 1 期, pp.47-51.
賽漢卓娜（2017）「『ナショナルな標準家族』としての日本の国際結婚」平井晶子・床谷文雄・山田昌弘編『家族研究の最前線②出会いと結婚』日本経済評論社, pp.71-101.
斎藤淳子（2023）『シン・中国人：激変する社会と悩める若者たち』筑摩書房.
張琢（2016）「中国における婚姻と家族の研究」『佛教大学社会学部論集』第 63 号, pp.79-100.
陈卫民・李晓晴（2020）「晚婚还是不婚：婚姻传统与个人选择」『人口研究』第 44 卷第 5 期,pp.19-32.
内閣府男女共同参画局（2022）「結婚と家族をめぐる基礎データ」.
山田昌弘・白河桃子（2008）.『「婚活」時代』 ディスカヴァー携書.
山田昌弘（2017）.「日本の結婚のゆくえ：困難なのか、不要なのか」平井晶子・床谷文雄・山田昌弘編『出会いと結婚』日本経済評論社, pp.25-44.
山田昌弘（2019）『結婚不要社会』 朝日新書.

「相互の意味付け」を通して見る日本の若者の友人関係における コンフリクト行動

郭　仁敬（西南学院大学大学院）

1. 研究の背景

コンフリクト（対立）・コミュニケーション研究は、長年の間、西洋の価値観や学術的基盤に依拠して展開されてきた。ホフステード研究における文化的次元や文化的自己観、高コンテキスト・低コンテキスト文化などがその例であり、これらは、日本人のコンフリクト行動を説明するうえでも頻用されてきた（Miyahara, 2023）。しかし、このような理論的枠組みには、①二項対立的な概念としての限界、②個人主義・集団主義に関する概念的・方法論的問題、③日本人の言動に対する表層的な捉え方、について批判の目が向けられている（郭, 2023）。また、コンフリクト対処スタイルに関する Dual Concern Model も西洋的価値観に根差したモデルであり、文化普遍的に適用するには限界がある。

さらに、対処法以前に「コンフリクトとは何か」という認識論・存在論的な基盤が文化によって異なることが指摘されている（Miyahara, 2023）。したがって、既存の理論やモデルの限界を克服し、日本的コミュニケーションの理論化を目指すには、行動の背景にある人々の認識や態度を研究することが不可欠である。

そこで本研究では、シンボリック相互作用論（Blumer, 1969）を理論的視座に据え、日本の若者の友人関係におけるコンフリクト行動を探求する。日本の若者の友人関係に関しては、互いの気持ちを傷つけず、関係を壊さないことに重点を置く傾向に加え、それによる息苦しさや悩みを抱えた若者の存在が指摘されている（土井, 2015; 松永・岩本, 2008）。コンフリクトは双方の面子や人間関係に対する脅威であることから、人は自分の能力や経験を最大限に生かしてコンフリクトに対処する。したがって、コンフリクトを研究の軸とすることで、日本の若者の人間関係やその背後にある態度を詳細に明らかにできると考えられる。

以上を踏まえ、本研究は、日本の若者が友人とのコンフリクトの際にどのような行動をし、それらをどのように認識しているのかということや、彼らが「コンフリクト」をどのように捉えているのかを明らかにすることを目的とする。人がものごとに付与する「意味」に焦点を置き、日本の若者のコンフリクト行動を文化固有の枠組みで分析、研究するイーミック（emic）な視点から捉え直すことを試みる。

2. 研究手法

本研究では、エスノグラフィーを採用し、表面的な行動のみならず、その背景にある認識や態度に関する「厚い記述」を志す（Geertz, 2008）。そのため、福岡市内の私立大学の硬式野球部を対象とした約 3 ヶ月間の参与観察と深層インタビューを行った。該当部署のチーム構成員は 1 年生 1 人、2 年生 4 人、3 年生 2 人、4 年生 4 人の計 11 人（うち男性 6 人、女性 5 人）である。インタビューデータは、テーマティックアナリシス法を用いて分析した。

3. 結果と考察

インタビューデータの分析の結果、以下のテーマとサブテーマが抽出された。

①【コンフリクトに対する意味付け】

（「コンフリクトに対する否定的な意味付け」「コンフリクトに対する肯定的な意味付け」「コンフリクトに対する中立的な意味付け」）

②【コンフリクトへの対処行動・意識】

（「自己主張とその際の意識」「相手重視の行動や意識」「話し合いによる解決の試み」「第三者の巻き込み」「自己主張しない」「感情の制御と冷静さの重視」）

③【先輩後輩関係】

（「対先輩意識・行動」「対後輩意識・行動」「対同期行動」「先輩後輩間の雰囲気」「家族構成と自らの先輩後輩関係」「先輩後輩関係におけるジェンダーによる違い」）

④【友人との関係性に応じたコミュニケーション】

（「友人との『距離』への認識に応じたコンフリクト行動」「意見を言える関係の構築」「友人関係におけるジェンダーによる違い」）

⑤【自分の言動や性格に関する内省】

（「過去の回想とそれによる気づきや行動変化」「自分の行動や性格に対する内的葛藤」「年齢に応じた成長の必要性」「自らの行動・思考・感情の言語化」）

本研究の分析結果と参与観察データを基に考察すると、以下の 5 点を主張できる。第一に、Dual Concern Model における競争型と回避型、同調型というコンフリクト対処スタイルや、コンフリクトというプロセスの捉え方は、日本の若者のコンフリクト行動に適用するうえで限界がある。第二に、日本の若者は、コンフリクトに対して、否定的・肯定的・中立的な意味付けをし、意味付けに応じて異なる行動をする。また、意味付けと行動が矛盾する場合や自分の行動に対して否定的な意味を付与している場合内的葛藤を経験する傾向にある。さらに、コンフリクトにおける感情的な振る舞いを未熟だと否定的に捉え、その認識に伴った行動をする。第三に、日本の若者は、相手との関係に対する意味付けに応じて行動が異なる。特に、率直な自己主張が可能になるには、相手との

関係において安心や信頼が認識されることが重要となる。第四に、彼らは、「先輩」に対して個人的、または社会的な意味付けをし、それに応じた行動をする。そして、その意味付けは、コンフリクトにおける第三者の介入や対先輩行動、対先輩意識と繋がっている。第五に、彼らは、相手のジェンダーに対して自分なりに意味を付与しており、それに応じたコミュニケーション・パターンを作り上げている。

以上より、コンフリクトや行動に対する「意味付け」を研究の中心に据えたことで、日本の若者の表面的な行動の背景には、状況や相手（との関係）、行動に付与する意味が大きく関与していることが明らかになった。日本的コミュニケーション研究を発展させるにあたって、人々が事象に与える「意味」に焦点を当てる重要性や意義が示唆されたと言える。

本発表では、研究プロセス及び得られた知見について詳細に報告したうえ、本研究の課題を踏まえ、今後の展望について議論したい。

引用文献

Blumer, H. (1969). *Symbolic interactionism: Perspective and method*. Eaglewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.

（ブルーマー, H. 後藤政之 (訳) (1991).『シンボリック相互作用論的―パースペクティヴと方法』勁草書房）.

Geertz, C. (2008). Thick description: Toward an interpretive theory of culture. In *The cultural geography reader* (pp. 41-51). Routledge.

Miyahara, A. (2023). De-westernizing the conflict management model: Is “avoidance” really that bad?. In X. Dai, & G.-M. Chen, *Conflict management and intercultural communication* (pp. 150-166). New York, NY: Routledge.

郭仁敬 (2023). 「個人主義―集団主義」の概観と日本文化との関係～日本人は集団主義なのか～」『西南学院大学大学院研究論集』*16*, 113-123.

土井隆義 (2015). 「友人関係の光と影～自由化と格差化の果て～」藤村正之（研究代表者）『流動化社会における都市青年文化の経時的実証研究 : 世代間／世代内比較分析を通じて』(pp. 45-47）上智大学総合人間科学部社会学科.

松永真由美・岩本澄子 (2008). 「現代青年の友人関係に関する研究」『久留米大学心理学研究』*7*, 77-86.

From English Communication to English/Communication
—A Case Study in Embedded Communication Interventions—

Eli Walgrave (Miyagi Gakuin Women's University)
Fumie Shibuya (Tohoku Bunka Gakuen University)

1. Introduction and Context

A growing trend of concern is the difficulty of Japanese young adults to communicate as well as express their agency. Loneliness and pathologic relationships are on the rise. With so many young people moving directly from high school to university, there are not always chances for them to develop their communications skills in a context that provides safety and tolerance for failure. And yet, young adults are expected to figure things out themselves. This sets young adults up for failure and a diminished quality of social life.

However, in many cases it can be difficult to mandate such kinds of training in universities. Organizational dysfunction can prevent many of these programs from getting off the ground before they even start. The good news, though, is that there are other places where this can be addressed. English classes are mandated at a national level, and the potential freedom of a language class can make for an effective staging ground for a communicative competence intervention program. This is a case study of one such disguised intervention program implemented within the context of a general education English course in several Japanese universities.

2. Design and Implementation

The backbone framework of the intervention was designed using Emmanuel Guardiola's Gameplay Loop Design Methodology. While created as a tool for designing video games, the methodology's focus on player action translates well for educational purposes. Each activity was mapped out into loops of student action, with each loop then being tuned to maximize student cognitive and communicative active time. These micro loops were tested over the course of one year in other classes before being adapted for the intervention program. Activities consisted of vocabulary practice, singular response discussion questions, and either long-form reading with response questions or experiential writing with presentation. Vocabulary and discussion questions utilized rotational partner activities in order to add

physical movement as well as facilitate multiple smooth conversations. Experiential writing and presentation were completed in groups, with individual presentation and presentation to the group. All reading was done aloud as a group, followed by group reading comprehension. Responses were then completed individually.

Materials were designed in one of two forms, writing/presentation and reading/reflection. All questions were designed as open questions with no specific correct answer. Likewise, each class period was focused on a particular topic. All topics were selected to be highly conceptual in order to guide students in thinking about things they haven't reflected on much before. These questions were designed to maximize disruption and generativity. The stable structure serves as an anchor for the meaning-making during the process of reflecting on and answering the questions.

A number of class periods were dedicated to games and activities. These activities took place either outdoors or in the classroom, and included games such as tag variants, ball games, and leadership and problem-solving games. Each game was played multiple rounds with intermittent discussion after several rounds. Discussion focused on themes concepts connected to communication and social dynamics. While the games and their associated discussions were carried out in Japanese, the personal written reflections following them was completed in English.

Students were allowed to use translation software for preparing their answers. This serves as an equalizer, allowing all students to complete everything regardless of level. It also has the secondary benefit of having students consider the questions and their answers in Japanese, disrupting their normal patterns of communication. The structure of the class and question content forces students to reconstruct their patterns of communication in both the first and second language, increasing the probability of change.

All assessment was formative, and the class did not have a test. Students were graded entirely on their completion of activities and written responses. There was also constant, informal observational assessment of response speed and depth, as well as feedback and questioning of responses through interaction.

3. Results and Considerations

Overall, students showed positive reactions to the intervention, with a positive

perception of their own communicative growth. Likewise, observational data from class sessions showed an increase in speed and depth when expressing opinions, as well as a considerably lower resistance to self-expression. Students reported the value of not only hearing and appreciating the opinions of others, but also the necessity of expressing their own perspectives. Likewise, many students noted that the program had pushed them to think considerably about their own thoughts and that this habit had extended outside of the classroom. Many student responses pointed to the games and their resulting discussions as a strong point of learning for them.

While this first case study is only an initial implication, the outcomes imply the potential of language classes as a vehicle for the development and improvement of communicative competence and other transverse skills. The ubiquitous nature of general education English, as well, shows much potential for broad skill development for Japanese university students.

競技ディベートの持続可能性に関する考察

上土井　宏太（鹿児島大学）

１．研究の背景

これまでディベートは、議論学、第二言語習得、主権者教育など幅広い分野で用いられてきた。ディベートはこれまで主に正課外の活動として行われてきており、日本語ディベートについては 1986 年に日本ディベート協会（JDA）がディベートの普及を目的として設立された他、English Speaking Society (ESS)では英語ディベートが盛んに行われ、ディベートの普及を担ってきた。このように、ディベートが日本に本格的に導入された初期において、ディベート活動を担ってきたのは競技ディベートを実践している人々であった。

一方で、競技ディベートの人口は近年減少している。日本語ディベートで出場資格に制限のない JDA 秋季大会を例に取ると、第 1 回大会（1998 年）は合計で 22 チームが参加しており、第 10 回大会（2007 年）は 32 チームが参加している（チーム数の調整が行われた、との記載があるのでさらに多くのチームが申し込んだと示唆される）。しかし、直近の第 26 回大会（2023 年）は 12 チーム、その前年の第 25 回大会（2022 年）も参加は 13 チームに留まっており、ディベート人口の減少の一端を垣間見ることができる（日本ディベート協会, 2023）。

競技ディベートの人口減少が著しいのが大学以降でのディベート活動である。例えば、高校生向け準備型英語ディベート全国大会（HEnDA）は、都道府県各地の予選を経て 64 チーム（2023 年度栃木大会）が参加している一方で、大学生向け準備型英語ディベート全国大会は 12 チームの参加に留まっている（全国高校英語ディベート連盟, 2023; NAFA, 2023）。大学以降でのディベート人口の減少は、高校生以下の競技ディベートだけでなく、教室ディベートへも影響を及ぼす。これまで HEnDA や日本語ディベート全国大会であるディベート甲子園の指導やジャッジは主に大学以降もディベートを続けていた経験者によって担われてきており、教室ディベートにおいても、現役でディベートを行っている大学生が高校を訪問して指導やジャッジを行ったり、ディベート経験者が教員となって指導を行っている。

このような状況を受けて、本研究の目的は、現役でディベートを続けている大学生にディベートを続けるモチベーションについてインタビュー調査を行うことで、その要因を明らかにすることである。さらに、ESS の運営責任者にもインタビューを行うことで、大学でディベートを続けてもらうための仕組みづくりについても明らかにした。

２．調査方法

２．１．現役ディベーターへのインタビュー調査

A 大学の ESS の Debate section において、英語即興型ディベートを行っている 6 名（男性 2 名、女性 4 名）を対象としてインタビュー調査を行った。インタビューは Zoom で行い、被験者の同意の下で録画を行った。インタビューは半構造化形式で行い、ディベートをはじめたきっかけ、ディベートを続けているモチベーション、性別によるディベートへの影響の有無、を予め質問項目として準備した。また、モチベーションの変化について視覚的に明らかにするため、大学入学当初から約 1 年間のモチベーションの変化についてモチベーショングラフを作成してもらい、その変化についてもインタビューで聞き取りを行った。

２．２．ディベート部運営責任者へのインタビュー調査

A 大学 ESS の Debate section において運営責任者を務めた 3 名にインタビュー調査を行った。A 大学を選択した理由は、競技ディベートの人口が減る中で、毎年 10 名前後の新入生が入部しており、比較的安定した運営を行っていたからである。インタビューは半構造化形式で行い、新入生を集めるイベントで意識していたこと、新入生が入った後に意識したことを中心に聞き取りを行った。

３．結果

インタビュー調査を行った現役ディベーターのうち、3 名は高校で HEnDA 形式のディベートを経験しており、この経験が大学でもディベートを続けるモチベーションになったケースもあれば、逆にモチベーションとならないケースがあることが明らかとなった。また、入部後のモチベーションの変化に関して、外部の大会に出ること、部内の人間関係がモチベーションを変化させる要因であることも明らかとなった。これらの要素について、第二言語習得の分野で用いられる L2 Motivational Self System（Dörnyei, 2005）を用いて分析を行った。

ESS の Debate section 運営責任者に対して行ったインタビューでは、新入生をディベートに勧誘するための様々な仕掛けを行っていることが明らかとなった。入部後には、自身の経験を踏まえて、ディベートの面白さや有用性を伝えることで、長くディベートを続けてもらう工夫を行っていたことが明らかとなり、この結果はディベート部の運営だけでなく、その他のディベート団体の運営においても応用可能であると考えられる。

発表当日は、これらのインタビューでの各学生の具体的な発話内容を紹介し、今後の競技ディベートの展望についても議論を行いたい。

引用文献

Dörnyei, Z. (2005). *The Psychology of the Language Learner: Individual Differences in Second Language Acquisition*. London and New York: Routledge.

NAFA (2023). Welcome to the 41st Japan National Debate Tournament 2023. https://tabbycat2023.herokuapp.com/JNDT2023/（閲覧日：2024 年 1 月 28 日）.

Morooka, J. (2020). Gender diversity in debate in Japan: An examination of debate competitions at the secondary and tertiary levels. In C. Winkler (Ed.), *Networking Argument*, (pp. 519-526). London and New York: Routledge.

全国高校英語ディベート連盟（2023, November 9）「全国大会出場校」https://www.facebook.com/HEnDAofficial/posts/pfbid02QBEbQctSKHD8CojRAoWMYNFN1bhTKqvtnrSawSVbRognhZdeCt9xPa98NH8esj9Sl?locale=ja_JP（閲覧日：2024 年 1 月 28 日）.

日本ディベート協会（2023）「これまでの大会結果」https://japan-debate-association.org/contest/history（閲覧日：2024 年 1 月 28 日）.

レトリックとしての法的フィクション

青沼　智（国際基督教大学）

1. 問題の所在

レトリックと法との関係は、レトリックが紀元前 5 世紀の地中海世界に生を受けて以来続いている。アテナイにおいて「どんな場合でもそのそれぞれについて可能な説得の方法を見つけ出す能力」（アリストテレス、1992、31 頁）が最も活躍したのは、法廷弁論であったことは言うまでもなかろう。現在も法廷は「正しさ」に関する弁論の場（島津、2001）であり、法的レトリックの研究も数多い（「特集=フィクションとしての法」、1986; Brooks & Gewirtz, 1996; Hariman, 1990 等参照）。

ただしレトリックと法の関係には、お互いにとってある意味「不都合」「不適切」な側面もある。言葉巧みに黒を白と言いくるめる「詭弁術」としてのレトリックが、法的言説空間において重宝されてきたという黒歴史である。そこにあるのは弁舌に長けた「ソフィスト」の弁論がもたらす、本来有罪であるものに対する無罪判決そしてまやかしの正義だ。そしてこの「ない」ものを「ある」と「でっちあげ」（礒部、1996、6 頁）るレトリックの詭弁的側面は、思想家でもあった法律家 Jeremy Bentham が忌み嫌いながらもその存在を法から排除することができなかった「法的フィクション」につながる。法的フィクションとは、現実世界では事実ではないもの・ことを法律上の現実として扱い、一定の法律効果を付与させる立法技術の一つである。モノや概念等、現実には人ではないものが法律上の人となり、人として扱われる事象、つまり「法人」はその典型だ。「フィクション的なものは、その存在を—実際にはありえないが、必ずあるとされる存在を—言語に、そして言語のみに負う」（Ogden, 1932, p.15）。表象すなわち実存たる法的フィクションは単なるフィクションではない。法律効果・拘束力を持ち、社会的現実・規範をも生成し得るレトリカルな存在である。

現実には人ではない会社や団体が、法律上、なぜ人と見做され得るのか。さらに、その法的フィクションすなわちあくまでも法律上の現実を、私たちの多くが現実世界においても受け入れているように見えるのはなぜだろうか。そこにあるのは詭弁を駆使したでっちあげか、それともレトリカルな「創造的認識」（佐藤、1978）か。近年は、動植物・自然環境またロボットや AI （人工知能）に対する法人格付与の可能性をめぐる議論すら見られる（Negri, 2021）。

2. 本研究の方向性

本研究は、この自らの存在を法という言語のみに負うという極めてレトリカルな存在である法的フィクションに焦点を当て、レトリックと法との関係のより多面的な理解を目指す。

まず手始めに、法的フィクションの法制史上の位置付けを法学の基本文献を基に確認する。中心は法人概念に関する、Bentham 以降の現代法における展開である。加えてその存在を法という言語のみに負う、法的フィクションとしての法人の特徴をレトリック研究の基本文献を基に確認する。

次に事例研究を通じ、法的フィクションのレトリックとしての特徴を明らかにするとともに、その法的効果・拘束力による社会的現実・規範の生成のメカニズムも考察する。より具体的には、法的フィクションの典型である、法人格が付与された会社および AI のレトリック性、またそのレトリカルな（潜在）力による現実創造・規範生成のプロセスについて考察する。まず会社については、経営者また構成員等から「切り離された人格」を法人に認めた英国の判例、加えて法人の「人権共有主体性」を肯定した国内の判例で展開された議論を整理し比較する。また AI については、法人化に関する立法また判例がまだない故、既存の法解釈に関する法律家・法学者の論考・議論を検討する。

3. 本研究の意義

法的フィクションに関する法学的研究は数多く存在するが、レトリカルな問題に言及したものはごく少数に満たない。他方、レトリック研究者による新自由主義経済下の会社=法人の「傍若無人な振舞」の批評研究（Thimsen, 2015）には、それが法的フィクションであるという法学的視点が欠けている。また生成 AI の著作権等、今後問題となるであろうロボットや AI の法人化に関する議論についてのレトリック研究は見られない。本研究は、このようなレトリック研究の「ブラインドスポット」を埋めることを目論む。

また比較法学的に見れば、現在、法的フィクションは広く認められている法的概念である。ただし、異なる（法）文化には異なる（法的）レトリックが存在するという対照レトリック的視点からは、特定の法文化に特徴的な法的フィクションのレトリック性の検討は学術的意義があると言える。法人格のレトリカルな側面について、異なる法文化(判例法主義(英国)と制定法主義(日本) 間)の判例分析を含む本研究は、比較法学と対照レトリックとの新たな接点を提示することにつながると考えられる。

引用文献

アリストテレス（1992）『弁論術』岩波文庫。
礒部卓三（編著）（1996）『フィクションとしての社会』世界思想社。
佐藤信夫（1978）『レトリック感覚』講談社。

島津格（2001）「正しさを語る教育―司法改革と初中等教育―」『ジュリスト』2001 年 7 月号。

Hariman, R. (1990). *Popular trials: Rhetoric, mass media and the law*. University of Alabama Press.

Brooks, P., & Gewirtz, P. (1996). *Law's stories: Narrative and rhetoric in the law*. Yale University Press.

Ogden, C. K. (1932). *Bentham's theory of fictions*. Routledge.

Negri, S. M. C. A. (2021). Robot as legal person: Electronic personhood in robotics and artificial intelligence. *Hypothesis and Theory 8*.

Thimsen, A. F. (2015). The people against corporate personhood: Doxa and dissensual democracy. *Quarterly Journal of Speech 101*.

「特集=フィクションとしての法」（1986）『現代思想』1986 年 6 月号。

地球環境保護に対峙する日本の超越的レトリック
―国内清涼飲料メーカーの2030年目標のペットボトルリサイクル目標を対象に―

田島慎朗（関西大学）

レトリック的超越性（Rhetorical transcendence）の概念はケネス・バーク（1994, 2009）が現代レトリックの枠組みで提唱して以来、発展を遂げた概念である。『歴史への姿勢』（原著 1935）のなかで、バークはレトリックの使用に超越性を見出した。人間の描写を神的なものとするか、あるいは動物的なものとするかについて、選択された特性は「本質」となり、描写されなかったほうは「偶有的特性」として処理されると同時に、「良い面、悪い面、どちらでもない面、などさまざまな面」をもちあわせていた人間は、選び取られた側面をもつ実態へと「超越」する（バーク、1994、p.439）。つまり、象徴行為は数多の特徴から特定のものを選び取り、選び取られた特性をもって対象を再定義することにより、対象を変質させるのである。

その後の『動機の修辞学』（原著 1950）において、バークは超越のレトリックの概念を弁証法との関連において発達させ、その役割を「修辞的共同戦線から究極的秩序というレベルでの解決への弁証法的進展」を可能にするものとした（p.287）。つまり、レトリックは弁証法的なロゴスの厳密さを乗り越え、究極的秩序というレベルへと向かうという意味において、弁証法（dialectic）を包括している、あるいは厳密な根拠の検証という手続きを凌駕すると論じたのである（p.287）。Zappen（2009）にとって、この主張がもつ現代的な重要性は、複数の、個々のレベルでは互いに論理的に矛盾する議論が、特定のビジョンによって別の次元へと転移する様態を理解する際の鍵概念になることである（p.281）。以上を受け継ぎ、近年は新しいデザインが生まれる過程（Bowie, 2020）や仏教僧の特定の発言がオンラインで拡散される過程（Elyamany, 2023）を分析する際の概念として、超越性が論じられてきた。

本発表は、この象徴的行為が、地球環境保護という喫緊かつ科学的手続き――すなわち、弁証法的論証による現状把握と未来への見通し――が重要と想定される領域において、超越的レトリックがみてとれるのではないかというケースを選定し、その言説を分析する。発表では、ペットボトルリサイクルの取り組みを提唱する日本国内の清涼飲料水メーカーの文書を取り上げる。特に、日本国内での販売ランキング上位で、清涼飲料水をビジネスの中核としていると思われるサントリーHD、コカコーラボトラーズジャパン、そして伊藤園の三社の文書を中心に論じたい。

本発表は、これらの日本国内という地域のペットボトルリサイクルの言説を、グローバル規模のプラスチックリサイクルの言説のなかに位置付けるが、国内のペットボトルリサイクル言説を特異性のあるものと認識する。その特異性は、日本国内のプラスチックやペットボトルの回収・

処理状況や、日本人が持っている（あるいは欠けている）と想定される知識という特殊な条件に裏付けられた、レトリック活動の結果として立ち現れてくるものである。ペットボトルリサイクルを含むプラスチックリサイクルは、グローバルな問題として世界各国に認識されて久しい。こうしたグローバルな言説には、ごみの輸出先である第三国への搾取構造、地球環境破壊、そして自然生物への脅威についての言説と結びつきながら語られてきた。しかしながら、日本はプラスチックやペットボトルを主に焼却処分することで、グローバルなプラスチックごみの言説とは距離をとってきた。これは、焼却処分するという独自の手法によって引き起こされるグローバルなリスク（二酸化炭素などの地球温暖化ガスをコンポスト処理よりも多く放出すること）とローカルなリスク（焼却にともなって出る有毒物質の処理にかかる費用と、それでも処理しきれない、燃やされたプラスチック残渣の処理）については他の問題（例えば焼却炉燃焼温度の問題や他国の問題）とみなし、やり過ごしてきたとも言える。

以上の状況にある日本において、ペットボトルリサイクル言説のもつ象徴的インパクトは、他国以上に大きいと論じる。ペットボトルの水平リサイクル、いわゆるボトル to ボトル（BtB）の技術は、今までほとんどを、「サーマルリサイクル」と呼ばれる実質焼却処分する方法や、劣化したプラスチック樹脂において強度が落ちても再度使用可能な製品にする「マテリアルリサイクル」といったまやかしの「リサイクル」とは一線を画すからである。水平リサイクルは、本当の意味でのリサイクル、つまり同じ物質を生産・消費・再製品化するというサイクルを指す。これまで、ペットボトルを含むプラスチックは容易に自然に還らず、燃やすにしても問題が出てくる「お荷物」であった。しかし、BtB が実現したら、そのような心配は無用である。我々消費者は一度限りの使用で使い捨てる罪の意識から解放され、地球環境、ひいては我々にとって完璧で究極の選択が用意されるという世界観をもたらすばかりか、企業利益のためには推奨すらされるのである（cf. Burke, 1984, pp.193-294）。

水平リサイクルほどではないが、各社表現が違うが「植物由来」のペットボトルを 2030 年までに「100 パーセント」にするというのも大いに魅力的な響きがある。今まで石油原料だったからこそ分解されずに地球環境や海洋生物に多大な被害を及ぼしてきたが、「植物由来」ならば今までのような被害はもう関係ない。ともかく、悪いイメージがついた石油から、クリーンでグリーンなイメージの「植物由来」への移行は、それだけで魅力的である。

発表では、レトリック的超越性を基調として、こうした議論をどのようにメーカーが展開しているかを分析・批評する。

引用文献

バーク、K.（1994）『象徴と社会』ジョセフ・R・ガスフィールド編、森常治訳、法政大学出版

局。

バーク、K. （2009）『動機の修辞学』森常治訳、晶文社。

Bowie, A. (2020). A Burkean Dialectical-rhetorical perspective on shifting design trends. *Southern Communication Journal, 85*(2), 125-138.

Burke, K. *Permanence and Change*. University of California Press.

Elyamany, N. (2023). What Buddhist wisdom is going viral?: A multimodal-appraisal analysis of a selection of Jay Shetty's digital narratives. *Social Science Journal, 60*(2), 316-333.

Zappen, J. P. (2009). Kenneth Burke on dialectical-rhetorical transcendence. *Philosophy and Rhetoric, 42*(3), 279-301.

ハマス・イスラエル衝突に関する日本の報道状況
―ウェブを用いた言語学的分析―

東照二（米国ユタ大学世界言語文化学部）

日本では、国政で政治資金問題が大きな争点となっている。また世界に目をやれば、ウクライナ・ロシアの紛争問題、また中東ではハマス・イスラエルでの極めて大きな紛争、衝突、攻撃が多発しており、世界を巻き込んで、重大な世界問題となっている。

本研究では、ハマスとイスラエルの紛争に焦点を当てて、特に、日本のマスコミ、報道、政府がどのように対応、評価を下しているのかを、言語学的な観点から考察してみることにする。

概して、日本のマスコミ、中東研究者の発言を中心とした評価については、いくつかの大きな問題点を挙げることができる。一つ目は、ハマスをパレスチナを代表する組織として捉え、ハマスは民主、市民への奉仕活動なども手掛ける、どちらかといえば肯定的な団体とみなす主張である。二つ目は、マスコミを含めた日本の報道姿勢が、テレビ、新聞などの表現に見られるように、ガザ地区で一体何が起こり、どうなっているのかの具体的な『事実』に基づいた報道が、正確になされていない（現時点ではマスコミ関係者はガザ地区に入ることはできない)、という点である。

これらを検証するために、本研究では、中東研究の専門家である飯山陽（あかり）氏の論点を、飯山氏のユーチューブ解説を元にしながら、言語学的に検討してみることとする。飯山氏の論点には、賛否両論があるとはいえ、概して肯定的な評価を得ており、最近の著書である「ハマス、パレスチナ、イスラエル」は、Amazon で一時、トップの評価を得ている。

この飯山氏のユーチューブ（「飯山あかりのいかりチャンネル」）分析から、いくつか具体的な論点を指摘しておこう。例えば、飯山氏は次のようなコメントを出している。

飯山：「岸田政権は、スライム激化は、トロ組織、ハマスの発表だけを鵜呑みにして、それが、全く全部、嘘であるにもかかわらず。それを全部、鵜呑みにして、政府としての公式見解をしています。ハマスの言っていることだけを鵜呑みにして、、、ちょっとやばくないという話なんです。実際、やばいんです。非常にやばい。」

このコメントで、飯山は次のことを指摘している。（１）ハマスは、トロ組織である、（２）ハマスの言うことだけを信用している、（３）他の組織、団体は、全く信用できない、ということである。つまり、日本政府として、ハマス「だけ」を信用し、ハマスはトロ組織では「ない」、と公言してい

ることになる。もちろん、これには異論が出てくることも考えられるが、飯山は自信、信念を持って、強く自分の意見を主張し、視聴者から多くの共感を得ていることがわかる。さらに、次のようなコメントも出されている。

飯山：「外務大臣である上川さんがこういう声明を出しているんです。ガザ地区における「攻撃」について。「攻撃」について。はっきり、言っているんですよ。「攻撃」について。あれは、「攻撃」なんだと。つまり、「攻撃」。ガザ地区における「攻撃」（長いポーズ）。つまり、これは、これはイスラエルの「攻撃」だって、言っちゃてるんですよ。」（鉤括弧を本稿では使用）

飯山は、「攻撃」と言う言葉を、この短い発言の中で、なんと、7回も使っていることになる。「攻撃」そのものの表現としては、それほど強い印象を与えないかもしれない。しかし、これが頻繁に、短く、7回も使われると、否応なしに、その言葉の響きが、とてつもなく、強く、心の中ですぐには消えない、強烈な印象となって聞き手に響いてくる言葉となる。単なる「進行」ではなく、「攻撃」の中には、強力な武力を用いた、反抗など全く不可能な、とてつもなく巨大な活動的な行い、と言うイメージが聞き手の間で強く沸き起こってくる言葉だと言える。政治家として、その分を超えた、強烈な言葉となる可能性大だと言えるだろう。さらに、飯山は、マスコミ関係者の偏向として、テレビ番組の TBS の看板記者である須賀川浩氏についてもコメントを出している。須賀川氏は、自分を「戦場記者」というタイトルで映画を作成し、その映画・写真の中で須賀川氏本人が写っている一枚をアップロードしている人物である。この写真について、飯山は、次のようなコメントを出している。

飯山：「これね。須賀川氏が、須賀川記者が、自分主演、自分監督で撮った映画があるんですよ。ドーン。戦場記者。ド、ドーン。これが自分なわけ。」

さらに、飯山は次のようにコメントを続行していく。

飯山：「これ、見た瞬間。アレ！アハ！これ、戦場じゃないやん。これ、レバノンの。事故現場写真やん。すぐに気づいたんですよ。みなさん。イカリちゃん（飯山あかり）、中東スライムの専門家だから。絵面見たら、大体、どっかって、わかる。わかるんですよ。あれ！これ、戦場じゃないやん。これ。レバノンの港で起きた事故現場写真やの。」

飯山は、須賀川氏が自分を「戦場記者」であると主張しながら、実際は、本当のところ戦場記者ではなく、写真はあくまでも戦場と全く関係のないところ（つまりレバノンの事故現場）で撮られた写真であることを如実に表現していることになる。「戦場」ではなく、「事故現場」の写真に、自分があたかも「戦場記者」であるかのようにして、写っている、そしてそれを公言している、と言うことになる。TBS の看板記者が、事実無根の、言ってみれば「嘘」をついて、それを記事にしている、というわけだ。報道とは、言うまでもなく、事実をそのまま、正確に聞き手、聴衆に伝えるべき作業だが、実際は、そうはなっていないということになる。これでは受け手からの共感を得ることは、全くできないというわけだ。

こういった事実と反する表現は、実はかなり頻繁に行われているようである。これでは、聴衆から共感を得ることは極めて難しくなってくる、と言えるだろう。

特に、言語学の専門家たちが主張するところの、話者、聞き手をともに共同で巻き込むようなスピーチスタイル（Involvement Strategy）（例えば、Tannen 1989）を基調に考えてみた場合、飯山の指摘は、詳しく考察するに値するものだと言える。総じて、こう言ったネットを通じた最新の研究を通じて、マスコミなどの報道、また新しいインターネットでの発信などが、今後の研究課題となることを指摘しておきたい。

参考文献：

飯山陽（２０２３）、「ハマス・パレスチナ・イスラエル：メディアが隠す事実」。扶桑社。

飯山陽（２０２３）、「飯山あかりのいかりチャンネル」。http://www.youtube.com/@ikarichannel.

Tanenn, Deborah (1989), *Talking Voices: Repetition, Dialogue, and Imagery in Conversational Discourse*. Cambridge University Press.

オブジェクト指向コミュニケーションモデルと教育
― いじめ・不登校の問題に対応して ―

小島　正美（東北工業大学）
宮曽根　美香（東北工業大学）

1. はじめに

2019 年末からのコロナ禍において児童・生徒のいじめ・不登校は深刻化し、重大事態となるケースが増えている。そこには二つの課題がある。一つは児童・生徒から初めに相談を受けた教職員による抱え込みである。二つ目は、いじめ相談を受けた側のいじめ・不登校対応チームによるいじめの重大事態として認識できなかったことである（伊藤、2018)。それを解決するためのオブジェクト指向コミュニケーションモデルを提案した（小島・宮曽根、2023)。

本研究は、そのなかで重大事態となっている 44%はいじめと認知されていない点を重要視した。児童・生徒のいじめ・不登校問題は、学校、家庭、地域のグループで連携しながら何が問題かを検討する必要がある。これらの問題を解決するモデルとして、ANT（Actor Network Theory）（柿田ら, 日本コミュニケーション研究第 51 巻, 2023）と OMT（Object Modeling Technique）（J.ランボーら, 1992)、(I.ヤコブソンら, 1995）を取り上げ、その中でモデル化しやすい OMT によるコミュニケーションモデルを適用し、オブジェクト指向コミュニケーションモデルおよび教育を考察する。

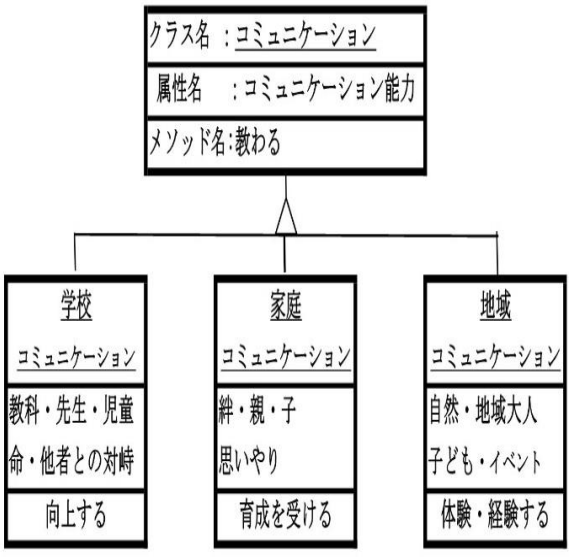
２．いじめ・不登校に関する統計および分析

文部科学省調査宮城県分の小中学校および全国の小中学校（2018～2022）のデータから、宮城県と全国の小学校および中学校の不登校出現率 ((不登校者数/全児童数) ×100)の相関係数 r を調べた。r はそれぞれ 0.99, 0.96 と非常に高い相関となった。宮城県小学校と中学校のいじめ（2018~2022）の r は 0.96 で非常に高い相関となり、小学校と中学校のいじめの状態は同じ傾向となった。宮城県小中学校のいじめと不登校出現率の r は、それぞれ- 0.92 と- 0.61 で、中学校において負の相関が小学校より低くなっている。それは 2019 年末から新型コロナ感染により、登校規制のなかで、中学校においては学校へ登校しなくてもスマートフォン（略：スマホ）などの情報端末で SNS（Social Networking Service）によるいじめが関係していると推測される。2022 年度国立、公立、私立の小中学校の不登校児童生徒数は約 29 万 9 千人（過去最多)、学内外で相談を受けていない児童生徒数は約 11 万 4 千人（過去最多)、その割合は 38%である。重大事態となっている 44%はいじめとは認

知されていない（引用：朝日 2023 年 9 月 27 日）。本研究は、この部分を重要視し、調査した。文部科学省のいじめの定義は 1986 年、1994 年、2006 年、2013 年と変遷し、2013 年からいじめの定義のなかに、「インターネットを通じて行われるものも含む」という文言が追加されている。2000 年代以降は、児童・生徒間のコミュニケーション形態がインターネットの普及により、スマホなどの情報端末に依存するようになり、いじめの性質が従来とは異なってきている。従来の「がき大将」的なリーダーによるいじめから「集団的」に個人をいじめるというスタイルに変貌し、「ネットいじめ」のように陰湿さが強くなっている。

３．学校・家庭・地域と連携したオブジェクト指向コミュニケーションモデル

「ネットいじめ」のような陰湿ないじめを解決するモデルとして、ANT（Actor Network　Theory）と OMT（Object Modeling Technique）を取り上げ、その中でモデル化しやすい OMT によるコミュニケーションモデルを適用した。モデル構築は、いじめを受ける児童をオブジェクトクラス「相談児童」とした。「相談児童」をアクターとして「いじめの事象」を文章化し、そこからオブジェクトの洗い出しを行った。洗い出したオブジェクトインスタンスから、モデルを簡素化するために抽象化したオブジェクトクラスを導き出す作業を行った。オブジェクトクラスは「クラス名」、「属性名」、「メソッド名」の 3 層から構成される。汎化は上位のクラスから下位へのクラスへ「属性」、「メソッド」を継承する特徴を有している。オブジェクト指向コミュニケーションモデルの汎化は図 1 に示す。学校、家庭、地域ごとに、それぞれオブジェクトクラス「先生」―オブジェクトクラス「児童」、オブジェクトクラス「親」―オブジェクトクラス「子ども」、オブジェクトクラス「地域大人」―オブジェクトクラス「地域子ども」との関係を導き出した。主体はオブジェクトクラス「児童」として、モデルを考えている。



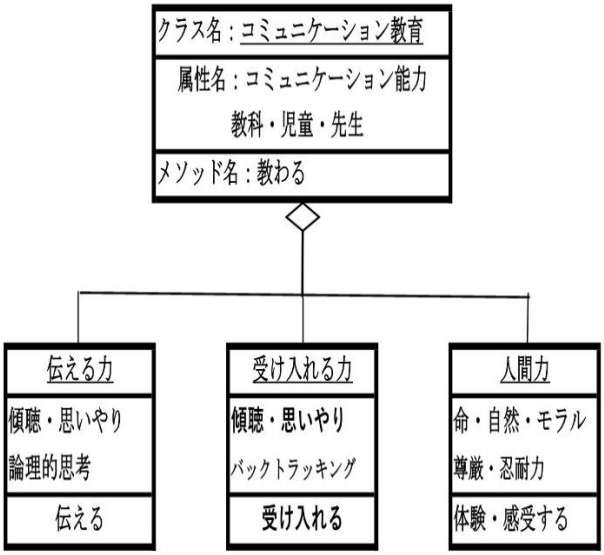


図 1 オブジェクト指向コミュニケーション　　図 2 オブジェクト指向コミュニケーション
モデルの汎化　　教育の集約

４．オブジェクト指向コミュニケーション教育

学校・家庭・地域と連携したオブジェクト指向コミュニケーションにおいて、「児童」は「コミュニケーション能力」をそれぞれ「向上する」、「育成を受ける」、「体験・経験する」となる。本研究では、学校における児童へのコミュニケーション教育は「伝える力」、「受け入れる力」、「人間力」から構成される、とする。その「集約」は図 2 に示す。「伝える力」、「受け入れる力」では「思いやり」の心や「傾聴」が必要で、「人間力」では「命」、「自然」への「尊厳」などが必要となる。人間力は、学校だけでなく、家庭や地域とも連携して育成することが必要で、学校・地域と連携したオブジェクト指向コミュニケーション教育のモデル構築は今後の検討課題としたい。

引用文献

伊藤淳(2018). 「学校におけるいじめ問題への対応ポイント」『いじめ対策に係る事例集』文部科学省児童生徒課

小島正美・宮曽根美香(2023). 「オブジェクト指向コミュニケーションモデルの一考察　―　コロナ禍における児童・生徒におけるいじめ・不登校対応チームによるモデル構築　―2022 年度 JCA 東北支部定例研究会発表資料

柿田秀樹・石黒武人・松本健太郎(2023).　「[特別企画]コミュニケーション理論研究会」　『日本コミュニケーション研究』第 51 巻 第 51 回年次大会特集号, 73−117.

J.ランボー・M.ブラハ・W.プレメラニ・F.エディ・W. ローレンセン(1992). 羽生田栄一(監訳)『オブジェクト指向方法論 OMT モデル化と設計』TOPPAN

I.ヤコブソン・M.クリスターソン・P.ジョンソン・G.ウーバガード(1995). 西岡利博・渡邊克宏・梶原清彦(監訳)　『オブジェクト指向ソフトウェア工学 OOSE　USE-CASE によるアプローチ』Addison-Wesley 』TOPPAN

オンラインにおける営業担当者の視覚的イメージと音声の組み合わせが顧客の関心に与える影響

八代　華代子（慶應義塾大学大学院博士課程）
白坂　成功（慶應義塾大学大学院）

1. はじめに

ビジネスコミュニケーションのためのデジタル環境は発展と進化を続けているが、営業担当者が顧客に対して行うオンラインでの効果的なコミュニケーションについては、対面と比べて、学術的に明らかになっていないことが多い(Bharadwaj & Shipley, 2020; Xiao & Burke, 2022; Taylor, et al., 2020) 。パンデミックを機に、営業担当者が自身のデバイスを使って、オンラインツール上で提案や商談をすることが普及した今、営業担当者のツール上の非言語情報がコミュニケーションの目的にどのような影響を与えるのかを明らかにすることは急務である(Yashiro, et al., 2023)。デジタル上にしか存在しない非言語情報を意図せず使うことで、対面コミュニケーションとのギャップがさらに広がる可能性も指摘されている(Baten & Hoque, 2021)。よって、本研究の目的は、オンラインツールの特性に着目し、営業担当者の視覚的イメージと音声の組み合わせが、顧客の関心に与える影響を実験によって明らかにすることである。音声チャンネルと視覚チャンネルはそれぞれ言語的・非言語的手がかりを生み出し、受信者の行動結果を導くといわれ(Van Kleef, 2009)、別々にアプローチする研究が多い。しかし、実際のコミュニケーションでは、非言語的な手がかりが単独で使われることはほとんどないため、視覚的手がかりと音声的手がかりの組み合わせの影響に着目する必要性がある(Yashiro, et.al., 2023; Patterson, 2012)。従って、本研究の新規性は、オンラインコミュニケーションで、発信者である営業担当者のツール上の視覚的イメージと音声の組み合わせが、受信者である顧客の関心へ与える影響を明らかにすることである。

2. 実験方法

2.1 設定

男女 1 名ずつの実験協力者が電気量販店の営業担当者として、各 1 名の参加者に対し、3 か月間の家電モニター募集のプレゼンテーションを Zoom で行う

2.2 参加者

社会人 107 名（男性 55 名・女性 52 名）

2.3 手順

カメラを OFF にした時に映す視覚的イメージ 3 種類「名前」、「無表情のプロフィール写真」、「笑顔のプロフィール写真」を用意。音声は、実験協力者が顔に表情をつけて話した動画と無表情の顔で話した動画を事前に録画し、音声部分だけ抽出した。要因以外全て同じになるように編集し、6 パターン（視覚 3×音声 2）の動画を作成。動画 No.1「名前×無表情の声」、No.2「名前×表情のある声」、No.3「無表情のプロフィール写真×無表情の声」、No.4「無表情のプロフィール写真×表情のある声」、No.5「笑顔のプロフィール写真×無表情の声」、No.6「笑顔のプロフィール写真×表情のある声」とする。尚、商談時にカメラを OFF にすることは一般的ではないが、回線や周囲の状況を考慮して OFF にすることが可能であるというオンラインの特徴に注目している。

2.4 実施

無作為に 8 群に分けた 107 名の参加者は、まず、動画視聴前に、家電モニター募集の概要を読み、「関心がある」「関心がない」の名義尺度で初期の関心の有無を評価した。続いて、6 パターンの動画を群ごと違う順番で視聴。それぞれの動画終了時に「提案を受け入れたいと思ったか」を、「はい」「いいえ」の名義尺度で評価し、視聴後の関心の有無を量った。さらに、「なぜ、そう思ったか」の理由は自由記述とした。

2.5 分析

統計ソフト SPSS29 を使用し、マクネマー検定で分析した。仮説は以下である。

a. 帰無仮説：動画の視聴前後で、提案に対する顧客の関心に違いがない。

b. 対立仮設：動画の視聴前後で、提案に対する顧客の関心に違いがある。

3. 結果と考察

クロス表（表 1）をもとに分析したマクネマー検定の結果（表 2）によると、全 6 パターンの動画の前後で顧客の関心の有無に有意差が認められた。よって、全ての動画について a の帰無仮説は棄却され、対立仮説である「動画の視聴前後で、提案に対する顧客の関心に違いがある。」ことが明らかになった。つまり、視覚的イメージと音声の組み合わせが顧客の関心に影響を与えていることが示唆された。これにより、営業担当者は、顧客の関心獲得のために思慮深くツール上の組み合わせを考慮しなくてはならないことが示された。一方で、どのような要素が影響したかまでは明らかになっていないため、発表では、アンケートの自由記述の結果も合わせて報告する。

表 1 組み合わせ動画（No.1～No.6）視聴前後の顧客の関心の変化 （クロス表）

	視聴後											
動画	No.1		No.2		No.3		N0.4		No.5		No.6	
視聴前	関心無	関心有	関心無	関心有	関心無	関心有	関心無	関心有	関心無	関心有	関心無	関心有
関心無 (n=48)	45	3	35	13	44	4	35	13	42	6	36	12
関心有 (n=59)	48	11	39	20	51	8	43	16	46	13	27	32

表 2 マクネマー検定による有意確率 (P<0.05)

動画	No.1	No.2	No.3	N0.4	No.5	No.6
χ^2 (連続修正)	37.96	12.02	38.47	15.02	29.25	5.03
有意確率	<0.01*	<0.01*	<0.01*	<0.01*	<0.01*	<0.01*

参考文献

Bharadwaj, N., & Shipley, G. M. (2020). Salesperson communication effectiveness in a digital sales interaction. *Industrial Marketing Management*, *90*, 106-112.

Xiao, L., & Burke, S. (2022). Persuading Others in Different Communication Media: Appeals to Logic, Authority, and Emotion. *Authority, and Emotion*.

Taylor, S., Graff, M., & Taylor, R. (2020). How can you persuade me online? The impact of goal-driven motivations on attention to online information. *Computers in Human Behavior*, *105*, 106210.

Yashiro, K., Shirasaka, S., Tanaka, K., & Kusano, K. (2023, July). The Effect of Salesperson Visual and Audio Cue Combinations Online on Customer "Motivation to Process". In *2023 14th IIAI International Congress on Advanced Applied Informatics (IIAI-AAI)* (pp. 19-24). IEEE.

Baten, R. A., & Hoque, E. (2021). Technology‐Driven Alteration of Nonverbal Cues and its Effects on Negotiation. *Negotiation Journal*, *37*(1), 35-47.

Van Kleef, G. A. (2009). How emotions regulate social life: The emotions as social information (EASI) model. *Current directions in psychological science*, *18*(3), 184-188.

Patterson, M. L. (2012). Nonverbal behavior: A functional perspective.

「チャンネル登録お願いします」のメタ語用論の試み
―指標性と接触の概念を手掛かりに―

谷島　貫太（二松学舎大学）

1. 「チャンネル登録お願いします」という問い

YouTuber が動画のなかで発する「チャンネル登録お願いします」という現在では一般的な発話は、一体どのような発話行為だろうか。この発話行為は、チャンネル登録をする、という行為を依頼している。しかし同時にこの発話は、コミュニケーションをめぐるメタコミュニケーションであるという側面も持っている。とはいえ、チャンネル登録をして欲しいという依頼と、会話に付き合いつづけて欲しいという依頼は、そのメタ性のありかたが大きく異なっている。チャンネル登録という行為を、仮に依頼者が動画を更新するたびに通知を受け取ることを許可する行為であると同一視するとして、その行為を依頼することはどのようなメタコミュニケーションであると言えるのか。

2. シルヴァスティンの指標性概念とアテンションの外在化

この問いに答えるには、コミュニケーションと、コミュニケーションを可能とするメディアとの関係性を考慮に入れる必要があると思われる。その入り口として、言語人類学者のマイケル・シルヴァスティンによるメタ語用概念に着目する(Silverstein 1976, Silverstein 1993)。シルヴァスティンは、ヤコブソンのシフター概念を踏まえながら、指標性を発話行為を特定のコンテクストに投錨する要素として一般化している。そこでは、発話行為が行われる〈いま・ここ・わたし〉という基点が、ビューラーの議論を踏まえてオリゴと呼ばれ、そのオリゴとの結びつきにおいて指標性が位置付けられる。そしてそうした指標性そのものに働きかける語用を、シルヴァスティンはメタ語用と呼ぶ。

レヴィンソン(2004)が述べるように、指標性はインテンションと同時にアテンションに関わる。それゆえ指標をめぐるメタ語用も、少なくとも二重の側面を有するはずだ。すなわち、発話の背後にあるインテンションを確認するメタ語用だけでなく、発話に向けられたアテンションを確認するメタ語用も考慮する必要がある。授業の最中に生徒の注意が散漫になっていると感じられたときに、「ちゃんと授業に集中してくださいね」と働きかけるのは、まさにアテンションをめぐるメタ語用だ。この例は、相手の現在のアテンションの状態に関わるものだが、未来のアテンションの状態への介入も可能だ。たとえば「ここから大事な内容になるので集中して聞いてくださいね」のような発話だ。「チャンネル登録お願いします」は、大きくはこのような、相手の未来のアテンション状態に介入しようとするメタ語用であると言える。

3. ヤコブソンの接触概念とアテンションの外在化

しかしそれでも、自身の発話に継続的なアテンションを向けることの依頼と、チャンネルに登録の依頼との間には、外部のメディアの介在という大きな隔たりがある。そこで、ローマン・ヤコブソンの接触概念を取り上げる。ヤコブソンはコミュニケーションを構成する六つの因子の一つとして、「接触(コンタクト)」を挙げている(ヤコブソン一九八四:一〇一頁)。ヤコブソンは「接触 contact」を「送り手と受け手が,ともにコミュニケーションに参加しまたそれを継続することを可能にするための物理的回路および心理的なつながり」であると定義している(同書: 101)。このヤコブソンの接触概念は、「心理的なつながり」というアテンションに関わるレベルに加えて、「物理的回路」というメディアに関わる次元も合わせて考慮に入れているのだ。

ヤコブソンが六機能図式を構想する際のモデルとなっていた技術は電話であり、そこではリアルタイムのコミュニケーションが想定されている。しかしそのモデルを YouTube のようなプラットフォームと入れ替えると、接触概念は大きく拡張される。「チャンネル登録お願いします」という発話は、YouTube において少なくとも、動画再生のインターフェースと、チャンネル登録の仕組みという二重の接触に関わっている。動画を見ているとき、ユーザーはたしかにメディアに接触している。しかし、YouTuber の依頼に応えてユーザーがそのチャンネルに登録するとき、そこで実現しているメディアとの接触は大きく性質を異にしているものだ。

チャンネル登録するという行為は、ユーザーのアテンションを外在化する行為である。その YouTuber の動画の更新を自分でチェックするというアテンションコストの投下を、プラットフォームが用意してくれる通知機能で肩代わりする、ということがそこでは行われている。チャンネル登録は、いわばメディアプラットフォーム上で物質化された「心理的なつながり」であるのだ。そして現代におけるメタ語用、そしてまたその代表的な事例の一つである「チャンネル登録お願いします」という発話は、こうした外在化されたアテンションをめぐるメタな介入という観点から理解される必要がある。

引用文献

ヤコブソン, R. (一九八四)『言語とメタ言語』池上嘉彦・山中桂一訳, 勁草書房.

Levinson, S.(2004). Deixis. *In Handbook of Pragmatics*, ed. L. Horn and G. Ward, 97–121, Blackwell.

Silverstein, M.(1976) Shifters, linguistic categories,and cultural description, Basso, K H. and Selby, H. A. (eds.),*Meaning inAnthropology*, pp. 11-55, University of New

MexicoPress,Albuquerque.

——(1993) Metapragmatic discourse and metapragmatic function, Lucy, J. A. (ed.), *Reflexive Language: Reported Speech and Metapragmatics*, pp. 33-58, Cambridge University Press.

アフォーダンス理論から考えるコミュニケーションとモノ
―ぬいぐるみを事例として―

宮脇　かおり（桃山学院大学）

発表者はこれまで、人とモノとのコミュニケーションを考える余地はあるのかという問いに取り組んできた。ではそもそもコミュニケーションとは一体何か。コミュニケーションの定義は無数にあるが、コミュニケーション研究の教科書としてしばしば言及される池田理知子(2015)『日常から考えるコミュニケーション学：メディアを通して学ぶ』ではコミュニケーションは「他者との関係性である」(p.17)とされ、他者との関係性が変容していくプロセスをコミュニケーションと定義している。さらに末田・福田(2022)はコミュニケーション論を4つの視点（機械論的、心理学的、相互作用論的、システム論的）に分類し、前者2つがコミュニケーションは人間が調整不可能な因果関係によって支配されているという前提に立ち、後者2つが人間は主体的に行動するものであるという前提に立っていると整理した。いずれの立場でも、コミュニケーションを人間同士の意味伝達や関係性構築と理解している。つまり、人とモノとがコミュニケーションを図ることは、これまでの定義上では不可能である。

しかし人とモノの関係性は、文化人類学やAIの分野で先行研究が行われている。文化人類学及び社会学の分野で活躍したブリュノ・ラトゥールらが提唱したアクターネットワーク理論は、モノも人と同様にコミュニケーション主体となると主張する。文化人類学者の奥野(2020)は、モノや植物などが人間と共通する心を持っているとの直感をアニミズムと定義し、あらゆる有機体と人間とのコミュニケーションの可能性を示唆している。また、人工物が人間と同じような行為の主体性を発揮するという事例（マオリの贈与の霊、バリ島の仮面劇など）も各地で報告されているという(床呂， 2018)。AI研究で著名なクーケルバーク(2020) は、人がロボットに感情を読み込むことがあると指摘している。例えば、ロボットにあえて何かがうまくできないという「弱さの窓」を備えることで、人間はそこに目を向け、手を伸ばし、ロボットと共に活動する社会的相互作用へと引き込まれる（河野・田中2023 p.177)という。このように、厳密にコミュニケーションとして定義づけられてはいないものの、他分野の先行研究から「モノと人のコミュニケーション」の可能性は示唆されている。

こうした立脚点から、発表者はこれまでにぬいぐるみ愛好家の語りを分析し、ぬいぐるみと人の間にコミュニケーションらしき現象が起こっていると主張してきた（宮脇2023)。しかし、前述の研究では複数の愛好家らの声を分析対象としてはいるものの、ぬいぐるみと持ち主とのコミュニケ

ーションは愛好家らの単なる妄想であると切り捨てられてしまう可能性が常にあった。そういった反論が前提としているのは、人間と非人間を全く異質の存在として位置づけ、人間だけが主体として特権化され、非人間は人間に操作される従順な客体であると考える人間中心主義(床呂　2018)であろう。本発表では、人がモノに意味付けを行うとする人間中心主義的アプローチではなく、ギブソンによるアフォーダンス論に依拠しつつ、モノが人にコミュニケーションさせてしまうという新たなアプローチを提唱する。

心理学者のギブソンによって提唱されたアフォーダンスとは、「媒質や面や対象などに備わる、環境の物理的属性が動物に特定の行為可能性を提供するということを意味する概念」（田中 2023, p. 31）とされる。例えば、ペンの形状や機能が人間に字を書くという行為を促していることが挙げられる。これをぬいぐるみに置き換えると、ぬいぐるみのふわふわとした形状やこちらを見つめているかのような瞳が、人間にぬいぐるみを抱きしめたり話しかけたりさせてしまうのである。ペンがあると文字を書いてしまうのは一般的と言えるが、ぬいぐるみがあると話しかけてしまうのは少数派であろうという反論も予想されるが、アフォーダンス論はそういった個人の感じ方の違いにも言及している。アフォーダンスとは物理的属性であり、行為主体がそれを知覚するかどうか、十分な注意を払うかどうかにかかわらず、実在する(田中 p. 34)。そしてアフォーダンスとは行動「可能性」であり、すべての行為主体が同一条件の元であれば同一の行為を選択するという類のものでもない。アフォーダンスとはモノと人の「関係性」を説明する概念であり、主体・客体の二分法の不適切さを我々に理解させる手助けともなる(田中 p. 34)のである。

本研究は、モノのアフォーダンスが人にコミュニケーションを促す事例として、ぬいぐるみに強い愛着を持つ人々の語りと実際のぬいぐるみの写真を集めた「ぬいぐるみ健康法人もふもふ会ぬいぐるみ病院」サイト内の「ぬいぐるみ病院アルバム」を分析対象とし、愛されているぬいぐるみが共通に持つアフォーダンスを抽出する。この分析から、モノと人とのコミュニケーションは人間側の主観的な意味付けというだけでは説明ができないという点を指摘したい。

本研究は JSPS 科研費 23K12612 の助成を受けたものです。

引用文献

池田理知子(2015)『日常から考えるコミュニケーション学−メディアを通して学ぶ』ナカニシヤ出版

奥野克巳(2020)『モノも石も死者も生きている世界の民から人類学者が教わったこと』亜紀書房

河野哲也・田中彰吾(2023)「第５章知の生態学の冒険、振り返りと今後の展望」河野哲也・

田中彰吾編著『知の生態学の冒険 JJ ギブソンの継承：アフォーダンスそのルーツと最前線』171-218.東京大学出版会

クーケルバーク・M.(2020)『AI の倫理学』直江清隆訳(代表)丸善出版

末田清子・福田浩子(2020)『コミュニケーション学―その展望と視点（増補版)』松柏社

田中彰吾(2023)「第 1 章心の科学史から見たアフォーダンス」河野哲也・田中彰吾編著『知の生態学の冒険 JJ ギブソンの継承：アフォーダンスそのルーツと最前線』9-39.東京大学出版会

床呂郁哉(2018)「『モノ』研究の新たな視座」桑山敬己・綾部真雄編著『詳論文化人類学:基本と最新のトピックを深く学ぶ』265-278.ミネルヴァ書房

宮脇かおり(2023)「ぬいぐるみという記号からコミュニケーションを捉え直す」『記号学研究 1』20-36.

領土・主権展示館とその名称役割について
～「日本固有の領土」としての北方領土とそのイマジナリー～

藤巻光浩（フェリス女学院大学）

領土問題は、常に人々の心をかき乱す。ひとたび注目を集めるような政治的ステージに登れば、喧々諤々の議論を引き起こす。領土問題があるとされる北方領土、竹島、尖閣諸島のいずれもが、折に触れて大きく報道され、メディア・イベント化されることもしばしばであった。

領土は、常に国家の主権の問題として扱われる。それが国家の「領土」として認識される限りにおいて、常に国家主権が侵犯される問題として認識されるためである。実際、主権概念は、土地の領有とセットになったものとして、ウエストファリア体制確立の後、国際法上、定着してきた。そのため、国家の安全保障とも一体化したものとして、国民国家の身体そのものとして認識されてきた。Tuathail（1996）によれば、これを「ジオボディ（geo-body）」と呼ぶ。そもそも島嶼などが、これほどまでに人々の感情を揺さぶることになるのには、どのような構造があるのだろうか。

この構造を紐解くための格好の事例が、2019 年に登場した。内閣官房室が領土・主権対策企画調整室なるものを組織し、「領土・主権展示館（National Museum of Territory and Sovereignty）」というハコものを作った。ここでは、主に上記の３つの領土問題に関する日本政府の主張が説明・展示されている。領土問題は、ついに「博物館」入りを果たしたのであった。ということは、主権と一体化した領土なるものが、「見る」行為を媒介し、対象を認識することができるようになったことを意味する。

一方、この展示館は、博物館法における「博物館（Museum）」ではない。英語名称に“National Museum”と付されていても、これはあくまでも「展示館」という日本語名称である。これが「博物館」ではないことの理由は、収集、保存、展示、教育・啓蒙という博物館の基本的な機能を有し、研究者などの専門家が展示内容を作成してはいるが、やはり「日本の領土を守っていくという政府の意思を示す」政治ビジョンを持ち、学芸員も不在であるため、「展示館」にとどまらざるを得ない。

この展示館に着目する理由は、領土の境界線が決定されるプロセスをかい間見せてくれているだけでなく、日本語で「博物館」という名称を使用せず、まさしく「展示館」と銘打っているからである。つまり、この名称が付されたことを通して、どのように、ある特定の島や土地などが領土として可視化される表現上の調整や折衝の過程や、それらを可能にする条件が固有に決定付けられているためである。多様な島嶼の領有や利用に関わる説明や様々な時代の地図などが持ち出され、展

示として調和のとれた「固有の領土」としての展示に収斂するのであるが、これらを批判的に解釈すれば、なぜ「展示館」という名称にとどまったのか、またその可視性のコミュニケーションを制御する理由や条件をも垣間見せている。この館における領土の展示は、何が領土としての資格を有し、または有することがないのか―この可視性の臨界点そのものによると思われる。

さらに、この展示館が興味深いのは、土地や島嶼に対して、主権という観念的なものを重ね合わせ、展示を通して「領土」として展示している点にある。展示に関わった高橋(2020)によれば、ここでは「見せ方の工夫」を施し、「視認性」を高め、「展示面、展示機能、レプリカ等を通じて・・・より直感的な説明」を狙ったとのことである（71-75)。ここでの説明キャプションや資料展示などによって、領土・主権という観念が、視覚的に誕生しているのである。本論は、この展示館において特定の意味が付与される過程を記述し、観念的な存在である「主権」が、説得力を持つ視覚対象として展示されることのコミュニケーションの条件を問うてみたいのである。

本論では、とりわけ北方領土の展示に焦点を絞ってみたい（他の領土問題については、別の機会に譲りたい)。まず第１に、北方領土は、領土問題の中でも最古参であるためだ。1981年より、「北方領土の日」なる記念日まで制定され、長い間、日ロ間の懸案事項として日本においては広く深く定着してきたからだ。第２に、北方領土は、この展示館が展示する他の領土問題とは、その性質が大きく異なるためだ。というのも、「北方領土」と名指される島嶼には、すでにロシア住民が暮らしており、無人の尖閣諸島や竹島とは異なる状況にある。しかも、日ロ間の協定により、いわゆる「ビザなし交流」が進行中であり、ロシア住民の元に日本人元住民たちが訪問するなどの交流も生まれているためである。この流れの中で、ロシアによるウクライナ侵攻以前は、元住人たちが新しい住人たちを「共生すべき隣人」（荒井 2000, 44）として認識するようになっており、新しい次元の関係も芽吹いている。このことは、高校生弁論大会における言説を研究した高橋の研究（2021）においても、記されている。高橋のことばを借りるなら、「領土認識の変容が起きている可能性」があるのだ（46)。

一方、この展示館においては、主権を排他的に行使し得る領土として北方領土を位置づけ、展示・説明を施している。社会の教科書をコントロールする学習指導用要領に記されているように、北方領土における国際法上合法的な主権を主張し、展示にも反映させているのだ。つまり、この展示館は、政府の見解を十全に反映させるべく作られた「メディア」ということになる。ここにおけるメディアとは、「展示館」という名称を与えられることで、政府広報としての役割を担うものである。

本論が考察の対象とするこの展示館は、英語名称では“Museum”と銘打っているのだが、日本語においては「展示館」という名称にとどまっている。スタッフに聞いても、これは「展示館」であることが繰り返し強調される。これは、この館が博物館法における「博物館」ではないためであ

るが、なぜ「展示館」というメディア名称が選択され、これが主権と領土との一体関係を前提とする考え方や思想と結びつけられているのか―これを問いとして掲げてみたい。つまり、本論では、なぜ「展示館」という名称を持つ館が、「主権＝領土」の一体性を確約し得る思想と相互補完的関係性を持つのか―その館としての性質を、近代ミュージアムの歴史、そしてその思想に引きつけつつ考察してみたい。「主権＝領土」という思想と、「展示館」という存在や性質には、果たして親和性や相互補完性があるのだろうか、ということである。

引用文献

荒井信雄（2000）「『ビザなし交流』に見るロシアにおける政府間関係と日ロ関係への影響」『札幌国際大学紀要』第 31 巻, pp.41-53

高橋徳嗣（2020）「新領土・主権展示館メイキングー日本の領土について「考える場」の創設」『島嶼研究ジャーナル』島嶼資料センター編、10 号（1）: pp. 70-105

高橋誠（2021）「北方領土という言説空間における領土認識の変容の考察－高校生弁論大会の分析を通してー」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』32 号: pp. 43-69

Tuathail, Gearóid Ó. (1996) Critical Geopolitics: The Politics of Writing Global Space University of Minnesota Press 1996

コミュニケーションとしての対話を再定義する
―「四象限の対話モデル」の意義と検討―

河村　まい香（明治大学）

1. 研究背景

近年、さまざま専門分野における研究者や実務家は、現代社会を創造し、変革するための対話というコミュニケーション形態へますますの期待を寄せている。たとえば、教育、ビジネス、哲学、政治、異文化理解、精神医療等、多様な分野で取り上げられ、注目を集めている（ガーゲン&ヒエストゥッド, 2015; 文部科学省, 2020; 斎藤, 2015 を参照）。

専門分野を超えた対話への関心の高まりは祝福されるべき一方で、このような幅広い発展は、対話という概念の曖昧さや、定義のばらつきを伴っている（Gergen et al., 2004）。対話が現代社会において必要性と潜在能力が認められつつあるにもかかわらず、現実には根付いていない状況の主因なのではないだろうか。

したがって、本研究において対話とはどのように定義できるのか、あるいは定義すべきであるのかについてあらためて整理し直すことを試みる。コミュニケーション研究分野における対話の定義に挑んだ先行研究の調査を通して、分野横断的で包括的な共通基盤を追究したい。ヨハンセン（Johannesen, 1971）が問題提起したように、今後の対話研究発展のためには、まず大前提として「下地」（groundwork）を整える必要がある。

2. 四象限の対話モデルの意義と検討

先行する対話の定義に関する千差万別な価値観や視点を整理するために、筆者が発案したのが「四象限の対話モデル」である。本モデルは、対話のもつ複雑性や多様性について包括的に捉えようと試みた、独自のアイデアである。最初に、四象限を構成する縦軸も横軸も矢印が一方向ではなく両方向に向いている。これは、スチュワートとゼドリカー（Stewart & Zedliker, 2000）による「対話の 3 つの緊張状態」の研究を応用しており、両極間を行ったり来たりして動態的に変化する緊張関係を表現する。各軸について具体的に、まず横軸は、対話中の、参加者の自己開示の程度を示す。対話中の自己開示が「オープン」または「クローズド」にされ、親密さが調整される様子を表している。次に、縦軸は参加者の視点の豊かさの程度を示す。対話プロセスにおいて、異なる立場や見解を反映して多声性（Bakhtin, 1981）が支持される場合、考えの視点の豊かさは「多元的」の極に向かうが、自分の立場を堅持し、個人的な一つの視点が明確になる場合には、「一元的」の極に向かうと考えられる。参加者は四象限の中のあらゆるポイントを揺れ動きな

がら、他者と協働で対話を構築する。本モデルによって、このような対話の時間的推移の様子や、創発的なプロセスを、視覚的かつ包括的に捉えることができる。

また、四象限の対話モデルの各 1〜4 象限を通じて、対話の 4 つの主要なパラダイムケースを考察することも可能にする。順に、情報探索的対話（information-seeking dialogue）、弁証法的対話（dialectics-oriented dialogue）、開示的対話（disclosure-oriented dialogue）、文化創造的対話（culture-making dialogue）と独自に名づけ、これらを分類した。この考察を通じて、どの専門分野で説明されている対話が真の対話であるのかという論争は不要なのだと主張したい。各領域において対話に期待する効果と目的が異なるため、それぞれの特性を尊重し、調和すべきだからである。四象限の対話モデルは、対話実践に対して 4 つの模範的なケースを提示し、文脈に応じた対話の機能的分析への利用にもつなげることができる。

4. おわりに

これまで対話の定義は千差万別であり、各専門家による定義がそれぞれ仲違いしており、それぞれの間でまさに対話が成り立っていないという問題があった。本研究では、それぞれの定義の正解不正解を問うのではなく、分野横断的な共通基盤を追究した。今後の対話への理解と実践に寄与することを目指した試みである。本研究の限界かつ今後の展望として 3 点が挙げられる。1 つ目に、四象限の対話モデルは、対話の曖昧性や文脈依存性を捉えた「広い対話の定義」である。理論上の検討のみではなく、現代社会へ効果的に根付かせてゆくためには、研究者はさらに対話の教育可能性についても議論を続けて行く必要があるだろう。そのためには相互補完的に、人々の対話の経験を深めるための指針や倫理について示した「狭い対話の定義」も提示する必要がある。２つ目に、対話が近年になって再注目を浴びている理由や、実際に行うのは難しい阻害要因について、その文化的および社会的背景の考察を加える必要がある。最後に、対話の有意義な実践を拡充するために、「対話のファシリテーターを増やしてゆくべき」という仮説の検討も今後深めてゆきたい。

引用文献

Bakhtin, M. (1981). *The Dialogic Imagination: Four Essays* (M. Holquist, Ed., C. Emerson, Trans.). TX: University of Texas Press.

Gergen, K. J., Gergen, M. M., & Barrett, F. J. (2004). Dialogue: Life and death of the organization. In D. Grant, C. Hardy, C. Oswick, L. L. Putnam (Eds.), *The SAGE Handbook of Organizational Discourse*, 39-59.

Johannesen, R. (1971). The Emerging Concept of Communication as Dialogue. *Quarterly Journal of Speech, 57*(4), 373-382.

Stewart, J., & Zediker, K. (2000). Dialogue as Tensional, Ethical Practice. *Southern Communication Journal*, 65(2-3), 224-242.

Taylor, D. A., & Altman, I. (1987). Communication in interpersonal relationships: Social penetration processes. In M. E. Roloff & G. R. Miller (Eds.), *Interpersonal Processes: New Directions in Communication Research* (pp. 257–277). Thousand Oaks, CA: Sage.

ガーゲン，ケネス、ヒエストゥッド，ロネ著、伊藤守、二宮美樹訳．(2015)．『ダイアローグ・マネジメント』ディスカヴァー・トゥエンティワン.

文部科学省．(2020)．「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」閲覧日 2022 年 11 月 23 日 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/__icsFiles/afieldfile/2020/01/28/20200128_mxt_kouhou02_01.pdf

斉藤環．(2015)．『オープンダイアローグとは何か』医学書院.

ボームとヴィゴツキーの接点を探る
―対話統合モデルの構築を目指して―

小坂　貴志（東京国際大学）

1. はじめに

対話論は、バフチン思想が代表的に取り上げられる傾向にあるが、分野を異にする複数の思想家による考え方が交錯しており、その結果、極めて学際的な展開を遂げている。バフチンをはじめ、ヴィゴツキー（発達心理学)、ブーバー（宗教哲学)、ボーム（物理学)、フレイエ（教育学)、オング（メディア論)、クレステヴァ（哲学）など、様々な学問分野で顕著な功績を残した研究家たちの声が混淆する状況を呈している。残念ながら、これらの思想家による類似性のみが前景化され、ある意味表面的な議論のまま、対話論の展開そのものに思想家同士の混淆が寄与せずに終わってしまう印象を強く受ける。本研究の目的は、対話論として取り上げられる対話論者の考え方を交差させ、統合対話モデルを構築することに最終的な目的を置いた、文献の予備的な比較である。

2. 先行研究のまとめ

一部の対話論者同士の部分的な考え方に関して、互いの考え方に対して既知であることが推測されるほどの類似性が指摘されている。バフチンとヴィゴツキーの対話に対する考え方（Bruner, 1987)、バフチンの「モノローグとダイアローグ」に対してブーバーの「我とそれ」、「我と汝」（桑野、2021）などをはじめ、その類似性を指摘されるものの、両者以外の場合でも、個々の思想が大成しているために、類似した部分的考え方をあえて融合しようとはせず、考え方の類似性を指摘するに留まってしまう傾向にあることが推察される。その例外として、バフチンとヴィゴツキーの考え方を融合させた例も見受けられる（Emerson, 1997）が、類似性が指摘される頻度に比べれば、極めて稀有な試みであろう。

これら先行研究のまとめを踏まえて、本研究では、「意識」、「思考」といった対話論の中心的概念を論じているボームとヴィゴツキーの考え方を比較考察し、最終的には統合モデル構築を目標にする。ボームは、量子物理学者という立場にありながら、独自の対話理論と対話実践を構築・展開させた。ヴィゴツキーは、発達心理学の領域において、児童発達への言語の果たす役割に関心を持ち研究を行なった。対話論において、ボーム、ヴィゴツキー両者は頻繁に参照されており、特に「思考」に対する深い洞察が共通して見受けられる。

3. 研究手法と手続き

具体的な研究手法として、ボーム著『ダイアローグ』とヴィゴツキー著『思考と言語』とを比較精読し、「思考」をはじめとする両者に共通する概念を抽出し、それぞれどのような意味で概念を論じているか、対話論における「思考」の位置付けは何かの 2 点について読み解いていく。ロシア語から英語または日本語への翻訳上の問題として、thought と thinking をどのように訳し分けるかが指摘されているが英語版の編者によって指摘されている（Rieber & Carton, 1987）が、ボームとヴィゴツキーの英語版をもって同一語と判断し、日本語で thought を「思想」、「思考」と二冊が訳し分けていても、同じ意味に解釈する。

4. 結果と考察

精読の結果、両者が説く「思考」の特徴的相違と共通点が判明した。ボームは思考を個人・集団の両面で捉えており、相容れない集団的思考を生み出し、社会的パラドックスの元凶となっている状況を嘆き、これを是正する目的で、地球上の多様的思考を 20～40 人のグループで実現させ、相容れない前提を保留する方法により相互に対話させることで社会的パラドックスを生じさせない対話実践を考案した。ヴィゴツキーは、個別児童の知能発達の各段階における特有の思考形態を、その言語使用によって、外言・自己中心言語・内言という 3 つに特徴付けた。児童を取り巻く大人からの外言を利用した児童への呼びかけによって可能となる知能発達に対話が介在することを検証した。一方、両者にとっての共通点は、思考が他者との相互作用によって築き上げられ、ボームは集団対話、ヴィゴツキーは指導としての教育対話が思考（再）形成に介在し得ることとなる。

5. 結語

対話論におけるボームとヴィゴツキーの「思考」の意味を解釈する本研究を通して、一見すると同一であるかのような概念であっても、ある複数の理論下においては異なる意味を有することもあり得る。今後は、本研究で取り上げた「思考」以外の共通概念について、またボーム、ヴィゴツキー以外の対話論者にも目を向け、古典資料の比較精読を行ない、最終的には対話の統合モデル構築を目指していきたい。

引用文献

Emerson, C. (1997). *The Outer Word and Inner Speech: Bakhtin, Vygotsky, and the*

Internalization of Language.（エマーソン, C. （井上徹（訳） （1997）. *外言と内言―バフチン、ヴィゴツキー、そして言語の内化 ミハイル・バフチンの時空* せりか書房、186-203）

Vygotsky, L. S. (1956). *Мышление и речь М.-Л.: Соцэкгиз, 1934. Подписана к печати в декабре 1934 года.*（ヴィゴツキー, L. S. （柴田義松（訳）(2001) *思考と言語* 新読書社）

Bohm, D. (1996). *On Dialogue* Edited by Lee Nichol: Routledge.（ボーム, D. （金井真弓（訳） （2007）. *ダイアローグ* 英治出版）

Bruner, J. (1987). *Prologue to the English edition*. In *The Collected Works of L. S. Vygotsky, Volume 1 Problems of General Psychology.* Edited by Robert W. Rieber and Aaron S. Carton: Plenum.

Rieber, R. W. & Carton, A. S. (1987). *Editor's Foreword*. In *The Collected Works of L. S. Vygotsky, Volume 1 Problems of General Psychology.* Edited by Robert W. Rieber and Aaron S. Carton: Plenum.

桑野隆（2021）. *生きることとしてのダイアローグ バフチン対話思想のエッセンス* 岩波書店

陰謀論研究の歴史
―陰謀論の学際性と向き合う―

小川　凜（明治大学）

1. はじめに

ここ数年、陰謀論にまつわる議論は、ポピュリズム現象や COVID-19 のパンデミックと関連して、研究者だけでなく一般市民の間でも加熱している。しかしながら、学術界と一般認識では陰謀論の捉え方がやや異なっている。一般的な認識では、陰謀論は、非合理的かつ危険な異常現象であり、理性から逸脱したパラノイドなものとされることが多い。一方で、学術界では、陰謀論は社会的、文化的、政治的現実の一部というように、より広い理解を示している(Uscinski, 2018)。とはいえ、学術的な陰謀論の研究は一枚岩なわけではなく、学問分野や学派によって陰謀論に対する倫理的規範、研究方法論、理論的アプローチにおいて幅広い態度が存在している。

陰謀論は長い歴史的伝統を持つ社会現象である一方で、陰謀論の研究が始まったのは、比較的最近で、20 世紀に入ってからである(Michael & Knight, 2018)。本稿では、これまで陰謀論研究がどのように進んできたのかを概観する。その上で、陰謀論が今後コミュニケーションの領域でどのように研究されるのかを明らかにしたい。陰謀論研究の歴史を整理することは、今更必要ないと感じる基礎研究かもしれないが、陰謀論研究は、最近の研究テーマであり、かつ日本での学術的な関心がまだ低いために、研究の整理は重要だと私は考える。

2. 陰謀論研究の芽生え

陰謀論に関する議論は、イギリス哲学者カール・ポパーが「社会の陰謀(conspiracy of society)」と呼んだもの、すなわち「すべての結果は、一見すると誰も意図していないように見えるものであっても、その結果に関心を持つ人々の行動の意図された結果である」という主張を批判したこと(Popper, 2011, p. 307)から始まった(Moore, 2016; Räikkä, 2018)。また、ポパーとは別の動向として、アメリカ政治学者ハロルド・ラスウェル(Lasswell, 1986)やフランクフルト学派のドイツ哲学者テオドール・アドルノら(Adorno et al., 1950)は、ホロコーストの余波の中で、陰謀論の危険性を強調し始め、どのような性格が陰謀論という非合理的な行為に陥りやすいのかを理解しようと研究を行った(Michael & Knight, 2018)。こうした点在する陰謀論への学術的な指摘を、アメリカ政治学者リチャード・ホフスタッターが、「パラノイド・スタイル」という陰謀論へのアプローチに理論化させた(Moore, 2016; Uscinski, 2018)。ホフスタッターは、陰謀論への信仰をパラノイア(偏執症)の一形態として病理化し、「常に少数派の運動のみが好むスタイル」(Hofstadter, 1964, p. 7)と定義づけたのである。

3. 陰謀論研究の確立

その後、数十年間(70 年代から 80 年代)、陰謀論の研究は主に歴史家の領域であり続けたが、陰謀論に関する研究が継続的な関心事として注目され始めたのは、1990 年代と 2000 年代のカルチュラル・スタディーズの研究者たちによってであった。彼ら彼女らは、ホフスタッターの「パラノイド・スタイル」に対する精神病理学的な解釈に異議を唱え、より中立的に陰謀論にアプローチできるような理論化を行った(Knight, 2000; Melley, 2000)。カルチュラル・スタディーズのアプローチによれば、陰謀論は「不確実な時代に奇妙な安らぎを与えてくれる」(Melley, 2000, p. 8)、また「しばしば難解で複雑な問題に対して、日常的な認識論的応急処置を提供する」(Knight, 2000, p. 8)ものとして捉えられた。陰謀論研究は、個人の精神病理学よりも、共同体が自分たちの世界を理解するために用いる集団的なナラティブに焦点が置かれ、陰謀論の魅力を理解し、文化的意義を評価することが課題であると捉えてきた。

4. 陰謀論研究の学際化

21 世紀に入ると、陰謀論は、ますます学際的な研究テーマとなり、現在まで、様々な学問領域から関心を集めるようになっている(Räikkä, 2018)。まず、21 世紀への転換期には、哲学の参入があり、主に分析哲学の領域として、陰謀論の概念的な問題を、陰謀論が必然的に間違いであるというポパーの主張を肯定する側と否定する側に分かれて考察されている。また、2008 年以降、社会科学者(心理学者、社会心理学者、政治学者)が陰謀論研究に本格的に参入するようになり、パラノイド・スタイルの前提に立ち、陰謀論的思考や信念の原因と治療法を考察している。

5. おわりに

このように、学問領域によって陰謀論に対する立場やアプローチが異なるため、研究を行う場合は、どの立場に依拠するのかを明確化する必要性がある。陰謀論は、政策決定を誤らせたり、制度や科学に対する信頼を損なったりする場合、社会に有害な影響を及ぼす可能性がある。こうした点から陰謀論を否定的に捉える研究も多い。しかしながら、これまでの研究が明らかにしたのは、陰謀論的思考は過激派ニッチ集団の特徴であり、パラノイアの兆候なわけでは必ずしもなく、誰もが陰謀論に関与する可能性があり、病的な理由だけではないことである。したがって、学問領域を横断するコミュニケーション・スタディーズでは、陰謀論との関わり方の多様性に敏感であり続けることが何よりも重要である。

主要引用文献

Adorno, T. W., Frenkel-Brunswik, E., Levinson, D.J. & Nevitt Sanford, R. (1950). *The Authoritarian Personality*, New York: Harper. Studies in Prejudice.

Butter, M., & Knight, P. (2018). The history of conspiracy theory research: A review and commentary. In J. E. Uscinski (Ed.), *Conspiracy theories and the people who believe them* (pp. 33–52). New York, NY: Oxford University Press.

Hofstadter, R. (1996 [1965]) *The paranoid style in American politics and other essays*, reprint, Cambridge: Harvard University Press.

Knight, P. (2000). *Conspiracy culture: from Kennedy to the X Files*. Routledge.

Lasswell, H. D. (1986). *Psychopathology and Politics. Chicago*. University of Chicago Press.

Melley, T. (2000). *Empire of Conspiracy: The Culture of Paranoia in Postwar America*. Cornell University Press.

Moore, A. (2016). Conspiracy and conspiracy theories in democratic politics. *Critical Review*, 28(1), 1-23.

Popper, K. 1952 [2011]. *The Open Society and Its Enemies*, 2nd ed. London: Routledge.

Räikkä, J. (2018). Conspiracies and conspiracy theories: An introduction. *Argumenta*, 6, 1-12.

Uscinski, J. E. (2018). The study of conspiracy theories. *Argumenta*, 3(2), 233-245.

第 53 回年次大会実行委員会 Annual Convention Committee

大会実行委員長 Program Chair

宮曽根 美香 （東北工業大学） Mika Miyasone (Tohoku Institute of Technology)

大会実行委員 Program Committee Members

會澤 まりえ（元尚絅学院大学）
五十嵐 紀子（新潟医療福祉大学）
川内 規会 （青森県立保健大学）
小林 葉子 （岩手大学）
関 久美子 （新潟青陵大学短期大学部）
宮曽根 郁 （仙台城南高等学校非常勤）

実行委員（JCA） JCA Committee Members

①大会プログラム・学術局関連 Convention Program

責任者	小西 卓三 （昭和女子大学）	Takuzo Konishi (Showa Women's University)
	日高 勝之 （立命館大学）	Katsuyuki Hidaka (Ritsumeikan University)
	宮曽根 美香 （東北工業大学）	Mika Miyasone (Tohoku Institute of Technology)
	菅野 遼 （昭和女子大学）	Ryo Kanno (Showa Women's University)

②大会プログラム・発表査読者 Review Committee

	小西 卓三 （昭和女子大学）	Takuzo Konishi (Showa Women's University)
	日高 勝之 （立命館大学）	Katsuyuki Hidaka (Ritsumeikan University)

③受付・事務局関連 Registration

責任者	松島 綾（立命館大学）	Aya Matsushima (Ritsumeikan University)
	宮脇 かおり （桃山学院大学）	Kaori Miyawaki (St. Andrew's University)
	脇 忠幸 （関西学院大学）	Tadayuki Waki (Kwansei Gakuin University)

④大会広報関連 Advertisement

責任者	松本 健太郎 （獨協大学）	Kentaro Matsumoto (Dokkyo University)
	今井 達也 （南山大学）	Tatsuya Imai (Nanzan University)
	宮崎 新 （名城大学）	Arata Miyazaki (Meijo University)
	友池 梨紗 （愛知淑徳大学）	Risa Tomoike (Aichi Shukutoku University)

コミュニケーション学会　会長及び本部（学会事務局）President and Office of JCA

会 長　　President　　守﨑 誠一（関西大学）　Seiichi Morisaki (Kansai University)

学会事務局

〒162-0801
東京都新宿区山吹町 358-5
アカデミーセンター
日本コミュニケーション学会事務局
Phone: 03-6824-9372　FAX：03-5227-8631

JCA Office：

The Office of Japan Communication Association
Academy Center
358-5 Yamabuki-cho, Shinjuku-ku, Tokyo
162-0801
E-mail: jcom-post@as.bunken.co.jp

入退会、住所等変更、会費納入、及び学会誌バックナンバーと記念図書購入申込に関する問合せ先：
For inquiries regarding membership, dues, and publications:

〒162-0801 東京都新宿区山吹町 358-5
アカデミーセンター
日本コミュニケーション学会事務局
Phone: 03-6824-9372　FAX：03-3368-2827

The Office of Japan Communication Association
Academy Center
358-5 Yamabuki-cho Shinjuku-ku Tokyo
162-0801
E-mail: jcom-post@as.bunken.co.jp